

驛遞局認可

明治十八年四月廿五日發兌

# 東洋學藝雜誌

東洋學藝社



第 四 拾 三 號



Means.

內項



緒言

我邦人ノ理學ノ思想ニ乏シキハ識者ノ  
 常ニ憂フルトコロナリ故ニ之ヲ救ハンカ  
 爲ニ此雜誌ニ理學ニ關係アル文章ヲ  
 掲載シテ其性質及ヒ功用ヲ世ニ明ニ  
 センテヲ力メタリ固ヨリ詰屈解シ難  
 キコトノミヲ討論スルニ非スト雖ト  
 モ世尙ホ或ハ此雜誌ノ讀ミ難キヲ困  
 シムモノナキニ非ス因テ更ニ其區域  
 ヲ廣メ文藝上ニ涉レル平易ナル文章  
 ヲモ其間ニ雜ヘ甘苦相半ナラシメ以  
 テ世人ノ望ニ負ク無キヲ期スト云爾

目錄

論說

○蠶ニ寄生スル蠅ノ口部

佐々木忠二郎

○孟子論法ヲ知ラス(三十八號ノ續) 井上圓了

○てんびんはれきけい

こま

○道義一定ノ規律ナキ所以ヲ論ス

寺山啓之助稿

○通俗「ダルウヰン」進化の理

霞城山人稿

理醫學講談會筆記

○手足ノ説

松原新之助

雜報數件

雜錄

○鳩の話

伊藤圭介漫記

學會記事



東洋學藝雜誌第四十三號

明治十八年四月廿五日發兌

○

蠶子寄生する蠅の口部

佐々木忠二郎

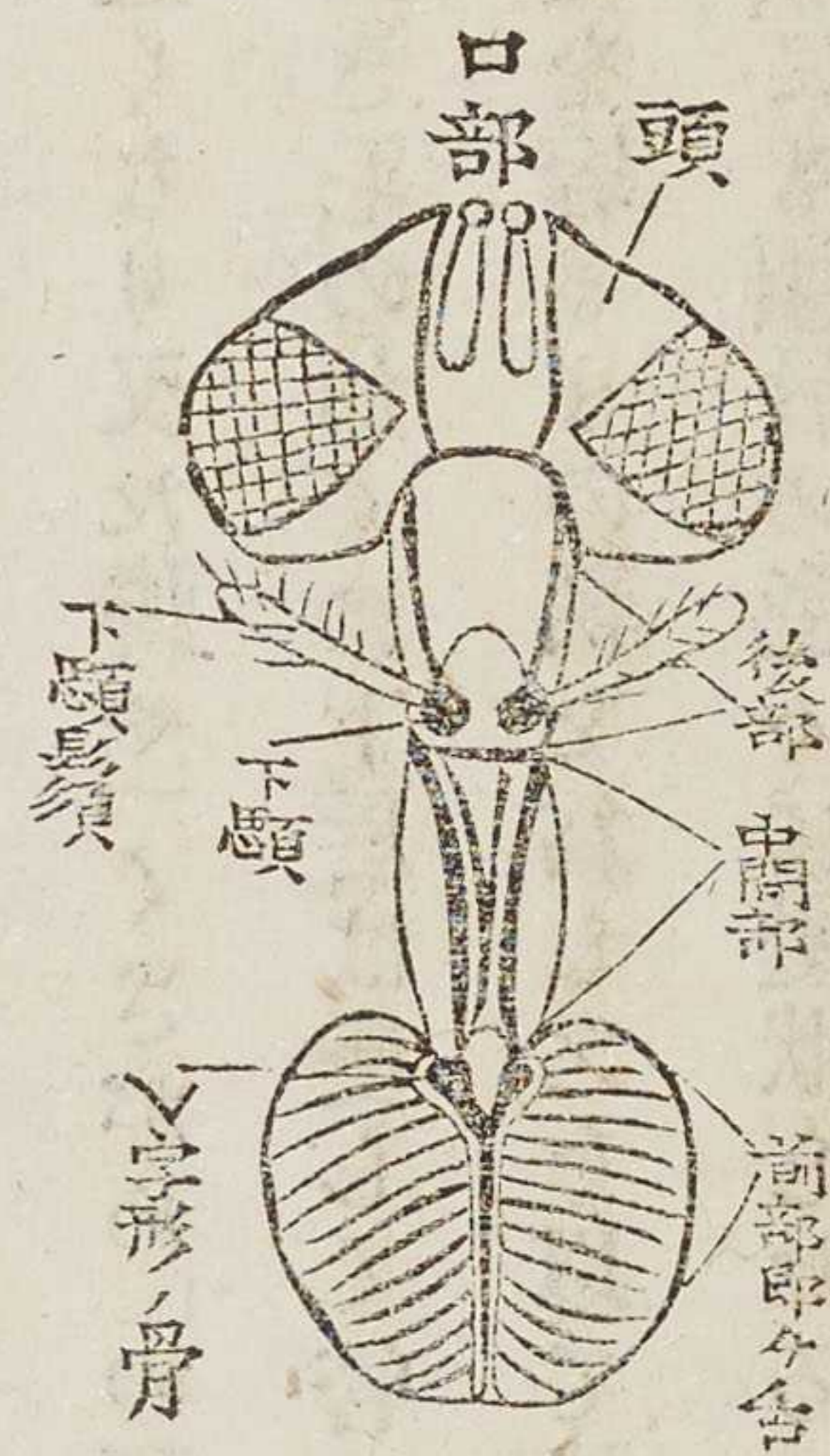
口とは食物を腹内に致すの門を稱ふるものにして齒は其門衛と爲りて口内に列座し食物を能く咬碎きて腹内に送るに差支なき様に爲すと掌るものなり故に動物たるもれば上ハ人間より下ハ軟体動物昆蟲類に至るまで口あるものは大概齒を具へ或は之を具へざるものあるも之と均き作用を爲すものを具ふるなり然れば人間ハ齒の數都合三十二枚ありて之を門齒犬齒小齶齒大齶齒の四種に分てり其他哺乳類にハ大約そ四種の齒を具ふれども或は其一二種を缺き或ハ四種共に之と缺くものも有り鳥類には齒ハなけれとも嘴にて能く物を啄み爬虫類にハ齒を存ずるものもあれども或ハ嘴に似たるものを以て物を咬むもあり兩棲類魚類よても齒を具ふるも其妙からずすべて右に掲擧けたる有脊動物は皆な齒を上下に搖かして咬合すものとしるべし之ヲ反して無脊動物には齒といふものハな

けれども之と作用を均しうするもの許多ありて章魚の如きものハ口は鳶鳥と稱ふるものあり之にて食を咬み田螺蝸牛の如きものには口に弦月形の硬く丈夫なる顎ありて之よて咬む事を得るなり章魚や田螺蝸牛の類の次ハ位する昆蟲類にも同じく齒と云ふものハなけれど上顎下顎と稱ふる物ありて齒の作用を爲し且つ上唇下唇といふものありて上顎下顎の作用を援くるなり然れども昆蟲類は其種屬ハ從て幾分か顎唇共に變狀するもの妙からず即ち甲蟲類ハ於ては二顎二唇を具へ以て物を咀嚼すれども蝶蛾類に於てハ之と違ひ上唇上顎共に不完全にして下顎は變して細長き舌となり又た下唇も不完全にして之に生ずる二本の鬚は篋け如き狀を爲して毛を被れり此舌は常に花蜜などを吸取るの用に供しその用なきときハ二個の篋の間に收置くなり又た蟬や「くさがめ」の類にては上顎下顎共に細長き毛の如くに下唇は變して管け如くとなりて此細長き毛を容るゝの鞘と爲し之を以て能く物を吸取するなり其外にも顎唇の色々に變狀したるものあれど姑くかきて本題の蠅の口を説起さんとする此蠅の口部は長

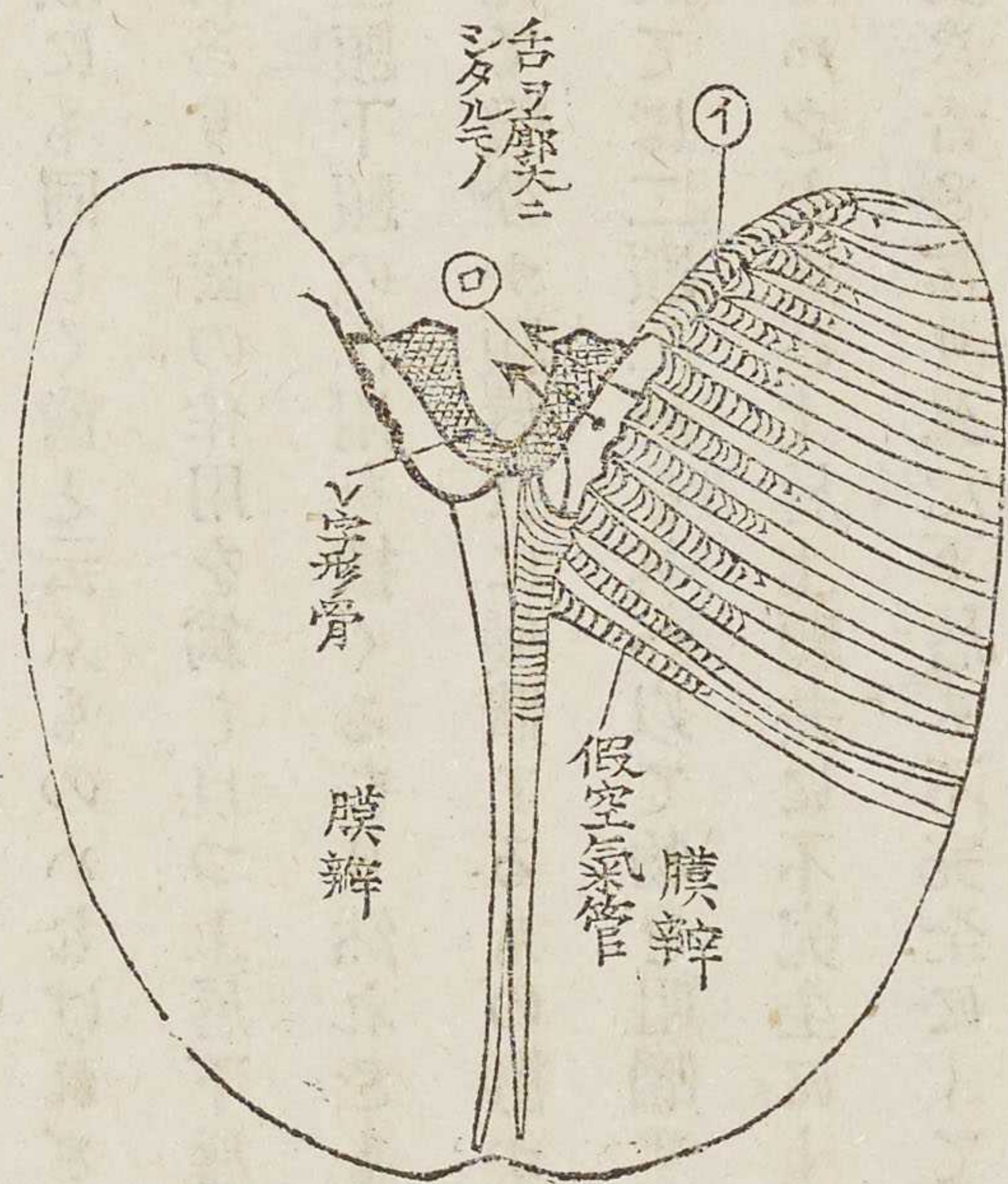


き管の如くにして熟ら之を調査すれも前後及び中間の三部に分れたり(第一圖)前部とは長管の遊離端を謂ひ後部とは長管の蠅の頭部に接する處を謂ひ中間部とい即ち前部と後部との間に存する部分を謂ふなり後部の表には硬き革質の板ありて之を被ひ其板は中間部に向ひて又狀を爲し其尖頭と接して細長きものを具ふ此れハ下頤鬚と稱ふるものにして昆蟲類ハ大抵之を具ふるものとす今下頤鬚の生ぜる處を注視するに此處ふ又ハ一種の橢圓なる革質盤を具ふるあり是れ實ハ下頤の變狀とて存するものに外ならざるなり左りながら他の蠅類よてハ下頤鬚を認識するのみにて更に右の橢圓盤と具ふるものハ未だ見たる人あるを聞かず又ハ余も之と見たる事をし次に中間部をよく調べみるに其表には「マクロコースケ」君が言はれし如く成るほど上頤と上唇とが合併して爲れる三角形の革質盤あり又ハ中間部の裏には溝形と爲したる下唇ありて此中間部の遊離端には扁平と開張せる肉質のものあり是れぞかの長管の狀と爲したる口部の遊離端にして前さ小前部と名づけしもの即ち舌是なり此舌に就きてハ隨

第一圖



第二圖



分面白き事あれば是より其解説に取掛らんと欲するなり扱舌の形ハ丁度橢圓なる膜瓣が各々其片縁にて連接せしものゝ如くにして其連接線の上の處にハ口を開き口の下

にはV字形の骨ありて此骨の左右の腕にハ二枚の膜瓣各

管に存する絲



さふ前部と名づけしもの即ち舌是なり此舌に就きてハ隨

ものゝ如くにして其連接線の上の處にハ口を開き口の下

にはV字形の骨ありて此骨の左右の腕にハ二枚の膜瓣各々其縁の一部と以て緊着せり(第二圖)故に腕ハ膜瓣の支柱より恰も團扇に柄を付けたると同様なり且又舌と其背に存する革質の骨に依て自由自在に其面と面とを合はす事を得へきなり蓋し蠅の食汁を吸はんとするときハ舌の兩瓣を張り擴げその用なきときハ此兩瓣の面を合はせて休ませたくものなり然れども余は舌の兩瓣を開張して圓盤狀を爲さしむるものを只ハ舌の背にある骨のみれ作用とするはちと覺束なきこと、おもひ段々と念を入れて取調べたりしに又々奇妙なる構造の存するあるを知り得たりろは他に非ず各膜瓣の裏にハ横に走れる三十九個の細條ありて之れを顯微鏡もて見るとさハ螺旋管として恰も昆蟲類の空氣管の如くに見ゆれどもなほよく之を注目すれを稍や特異なる處ありて且つ其尖頭も閉ぢられたるにより假空氣管の名あり「マクロコースケ」君が調べられたる蠅の假空氣管には螺旋狀の絲を存せずしてその代りに一端二枝に分れたる絲の順序正しく相連りたるものを存じたり(第三圖)然れども余が調べたるものゝ假空氣

第三圖 假空氣管ヲ廓大シタルモノ



管に存する絲は之れと妙しく異なりて兩端共に二枝に

第四圖 假空氣管ヲ廓大シタルモノ



裂け此の絲の間には少くも裂けざる絲を

挟みたり(第四圖)かくて三十九個の假空氣管は一つも洩さず膜瓣の内縁に沿ひたる一個の太き管(第二圖イ)に通ず左りながら此太き管ハV字形の骨に接する處にては開き裂け管の様にハ見ゆずして反て溝の(第二圖ロ)の如くに見ゆるなり此構造ハ實に舌を開張せしむるに缺く可らざるものゝやうに見ゆ其作用は舌の裏に存する骨より一層大切なるものゝやうに思はるゝなりなせといふに兩膜瓣を共に接する時は各瓣もある太き管の溝相接して閉ぢられ兩瓣を開張すれば溝又た開くるの趣あるが故に舌の兩瓣を相接する時ハ各自自然に壓迫せられて假空氣管内に存する空氣盡く太き管の溝より出で又た兩瓣を開張



する時のその溝及び之に開ける假空氣管は壓迫せられたるが爲めに少しも空氣を含む事なくして全く空虚なれば空氣の頓に壓入するの故を以て舌は之が爲めに程好く開張し以て其作用を全から志むるならんと信じて疑ひざる處なり

○

孟子論法ヲ知ラズ(前回ノツ、キ) 井上圓了

第十一段○公孫丑篇ニ仁則榮不仁則辱今惡辱而居不仁是猶惡濕而居下也ノ語アレモ是レ又事實相違ノ過失アリ奈何セン世間仁ニシテ却テ辱ヲ受ケ不仁ニシテ却テ榮ヲウルモノアルヲ若シ孟子ノ謂フ如ク仁ハ必ス榮ヘ不仁ハ必ス辱メラル、ニ於テハ世間誰レカ仁ヲステ、不仁ヲ取ルモノアラシ其之ヲ取ルモノアルハ不仁必スシモ辱ヲ受ケルニアラサルニ由ル凡ソ人ノ性タル辱ヲ惡ミ榮ヲ欲スルハ常ニシテ天下ノ事不仁果シテ辱ヲ受ケ仁果シテ榮ヲウルニ於テハ人ノ性其自然ノ勢ニ任スルモ不仁ヲステ、仁ニ走ルベキナリ而シテ世間不仁ニオルモ多キハ不仁ノ却テ榮ヲ得ルヲ多ケレハナリ然ルニ孟子ハ人ノ辱ヲ惡ミ

テ不仁ニオルモノヲ評シテ濕ヲ惡ミテ下ニ居ルカ如シト説キタルハ論理ノ當ノ失スルモノト謂フベシ

第十二段○孟子人ニ仁義ノ良心アル所以ヲ論シテ人皆有不忍人之心ト曰ヘリ是レ又論理上ノ過失ニ觸ル、モノトス人皆トハ人ノ全体ヲ指示スル語ニシテ有不忍人之心トハ人ノ部分ニ關スル實事ナリ野蠻下等ノ人民中ニハ往々不忍人ノ心ヲ有セサルモノアルモ其モノ敢テ禽獸ニアラス又二三歳ノ小兒ニハ未ダ此心ヲ有セサルモノアルモヒトシク是レ人ナリ故ニ人盡ク此心ヲ有スルニアラス而シテ孟子ノ人皆ト斷言シタルハ論理上ノ一過失ナリ次ニ人之有是四端也猶其有四體也トアルモ亦論法虛偽ノ一ナリ四端ハ人ノ必ス有スル所ニアラス四體ハ人ノ必ス有スル所ナリ世間往々四端ヲ有セザルモノアルモナホ一個ノ人タリト雖モ未タ四體ヲ有セスシテ人トナルモノアルヲ見ズ故ニ四端ト四體トヲ同一ニ論スルハ又孟子ノ誤リナリ第十三段○天時不如地利地利不如人和ノ章ノ下ニ君子有不戰必勝矣ノ言アリ此言ニヨレハ君子ハ百戰百勝小人ハ百戰百敗ナルベシ然レモ君子戰ヘハ必ス勝ツト云フノ實

證ナシ且ツ夫レ孟子ハ天時地利ハ人和ニ如カスト云フト

ル亦葛伯ノ比ニ非サルナリ此際ニアリテ一朝王政ヲ行フ



却テ榮ヲ得ルコト多ケレハナリ然ルニ孟子ハ人ノ辱ヲ惡ミ

百戰百敗ナルベシ然レモ君子戰ヘハ必ス勝ツト云フノ實

證ナシ且ツ夫レ孟子ハ天時地利ハ人和ニ如カスト云フト  
雖モ世間人和ヲ得テ而モ敗フトルモノアリ地勢ヲ得テ却  
テ利ヲ占ムルモノアリ是レ他ナシ勝敗ハ其時ノ勢ニアリ  
テ人カノ能ク動カス所ニアラサレハナリ然ルニ孟子爰ニ  
戰必勝矣ト断定シタルモ亦過言ナリ

ル亦葛伯ノ比ニ非サルナリ此際ニアリテ一朝王政ヲ行フ  
者アルモ天下皆之ニ服歸スヘキ理ナシ縱ヒ天下皆歸化ス  
ベシト定ムルモ今夕王政ヲ行フテ明朝人盡ク歸化スルニ  
アラス其間多少ノ年月ヲ要スルヤ必セリ果シテ然ラハ王  
政ヲ行フテ未タ人ノ歸化セザルニ齊楚ノ強國之ヲ攻メテ  
止ムコナクンハ如何スヘキヤ蓋シ當時ノ勢諸侯タトヒ王

第十四段○滕文公篇ノ初段ニ顔淵曰舜何人也予何人も有  
爲者亦若是トアレモ之ヲ實際ニ考フルニ人爲スコアルモ  
盡ク同一ニ舜トナルベカラス何者各人其父祖ノ遺傳性異  
ナルヲ以テ生來有スル所ノ本能原性皆之ニ從フテ異ナレ  
ハナリ本能原性已ニ異ナレハ何程之ニ同一ノ教育順應ヲ  
與フルモ將來ノ同等ノ人トナル能ハス故ニ各人皆盡ク同  
一ニ爲スコアルモ同一ニ舜トナルコト能ハスト知ルヘシ  
第十五段○萬章ノ問ニ宋小國也今將行王政齊楚惡而伐之  
則如之何トアリ是レ蓋シ當時ノ實況ニシテ萬章ノ問ヲ起  
スモ固ヨリ其所ナリ然ルニ孟子ハ之ニ答フルニ湯王ノ葛  
伯ヲ征セシ一例ヲ以テスト雖モ是レ又不當ノ例ト云ハサ  
ルベカラス昔日湯王ノ時ト當時戰國ノ世トハ其間千餘年  
ヲ隔ツルヲ以テ固ヨリ同日ニ論スベカラス齊楚ノ強大ナ

第十六段○其末段ニ至リテ孟子楊墨ノ道ヲ論シテ楊氏爲  
我是無君也墨氏兼愛は無父也無父無君是禽獸也ト曰ヘリ  
是レ何ソノ言ソヤ誹謗モ亦過甚ナリ楊氏ハ自愛ヲ以テ主  
義トナス無君ヲ教フルニアラス墨氏ハ兼愛ヲ以テ道トナ  
スモ無父ヲ勸ムルニアラス兩氏ノ説ク所固ヨリ人ノ教ニ  
シテ禽獸ノ道ニアラス二者其本意ニ至リテハ孔孟ノ意ト  
同一ニシテ固ヨリ人獸ノ懸隔アルニアラス唯其見ル所異  
ナルヲ以テ其説斯ク相分ル、ノミ然ルニ孟子ノ論ノ如キ  
ハ楊墨ノ主義ト立ツル所ヲ聞キ臆斷ヲ以テ之ヲ其未タ言



ハサル所ニ及ボシ其至要ノ点ヲ論セズシテ唯其至要ノ点  
 ヲ舉ゲ且ツ之ヲ敷衍シテ是レ無父無君ノ教ナリ是レ禽獸  
 ノ道ナリト種々之ヲ誹謗シ以テ其道ヲ排斥セントス是レ  
 豈至論ナランヤ若シ此ノ如ク論スルニ於テハ孟子ハ性善  
 ヲ説クヲ以テ是レ世間ニ不善人ナシト云フノ論ナリ荀子  
 ハ性惡ヲ唱フルヲ以テ是レ世間ニ聖人ナシト云フノ論ナ  
 リト評定スルモ亦當然ナリト稱セザルベカラス且ツ又孔  
 孟ノ教ハ人ヲ愛スルヲ以テ道ト定ムルヲ以テ是レ無我ノ  
 教ナリ無我ハ人ノ道ニアラザルヲ以テ孔孟ノ道モ亦禽獸  
 ナリト臆定スルモ不可ナキナリ此ノ如キ論理ハ一見シテ  
 人其非ナルコトヲ知ル蓋シ孟子ノ楊墨ヲ論スル俗ニ所謂僧  
 ヲ惡ミテ袈裟ニ及ブノ類ニシテ之ヲ厭惡スルノ極自ラ其  
 論ノ僻点ニ走ルヲ覺ヘサルナラン

第十七段○離婁篇中ニ今惡死亡而樂不仁是猶惡醉而強酒  
 トアルハ余カ第十一段ニ論スル所ト同シク孟子ノ僻見ナ  
 リ今人ノ死亡ヲ惡ムハ一般ノ通性ナルモ不仁者必スシモ  
 死亡スルノ實證ナシ若シ不仁者必ス天死シ仁者必ス壽ヲ  
 得ルニ於テハ誰レカ仁ヲ去リテ不仁ニ就クモノアラシキ

之レアルハ天壽ハ仁不仁ニ關係セサルヲ以テナリ然ルニ  
 孟子爰ニ比喻ヲアケテ其理ヲ示スト雖モ其比喻又事實ニ  
 相反ス何者酒ヲ強ルモノ必ス醉フモ不仁ヲ樂ムモノ必ス  
 死亡スルニアラサレハナリ

第十八段○同篇ニ民之歸仁也猶水之就下獸之走壙也トア  
 ルモ又事實ト比喻ト相應セサルノ過失ニ觸ル、モノナリ  
 民ノ仁ニ歸スル果シテ水ノ下ニ就クカ如クナルニ於テハ  
 之ヲ其自然ノ性ニ任スルモ皆仁ニ歸スヘキナリ然ルニ孔  
 孟ノ如ク終身天下ヲ周遊シテ仁義ヲ説クモ人ノ之ニ歸ス  
 ルモノナキハ何ツヤ是ニ由テ之ヲ觀レハ民ノ不仁ニ歸ス  
 ル却テ水ノ下ニ就クカ如シト謂フテ可ナリ

第十九段○次章ニ仁人之安宅也義人之正路也曠安宅而弗  
 居舍正路而不由哀哉トアルハ第十七段ト其論意ヲ同フス  
 仁果シテ人ノ安宅ナラハ人誰レカ之ニ居ラサルモノアラ  
 シキ義果シテ人ノ正路ナラハ人誰レカ之ニ由ラサルモノア  
 ラシキ然ルニ世間其人ナキハ何ソヤ仁義ハ人ノ安宅正路ニ  
 アラサレハナリ仁義已ニ安宅正路ニアラサル以上ハ之ヲ  
 舍テ、由ルモノナキモ敢テ哀哉ノ嘆ヲ要セサルナリ

第二十段○又同篇ニ君仁莫不仁君義莫不義トアレ君仁

氣風アリ顔回ハ退守ノ性質アリ兩氏ノ性質斯ク異ナル以



得ルニ於テハ誰レカ仁ヲ去リテ不仁ニ就クモノアラシキ

舎テ、由ルモノナキモ敢テ哀哉ノ嘆ヲ要セサルナリ

第二十段○又同篇ニ君仁莫不仁君義莫不義トアレモ君仁ニシテ不仁ノモノアルヲ如何セン君義ニシテ不義ノ者アルヲ如何セン君不仁ニシテ仁者アリ君不義ニシテ義士アルヲ如何セン此ノ如キハ例外ノ例ナルカ何ヲ以テ之ヲ例外ノ例トナスヤ民ノ仁不仁ハ多少君ノ仁不仁ニ關スルコナキニアラスト雖モ君ト民トハ固ヨリ影附響應スルモノニアラスト故ニ君仁ナルモ下仁ナラサルモノアリ君義ナルモ下義ナラサルモノアルナリ

第二十一段○同篇ノ末段ニ至リ孟子ハ禹稷顏回ノ道ヲ同フスル所以ヲ論シテ禹稷顏子易地則皆然ト曰ヘリ是レ禹稷顏回ノ性質ヲ知ラサル僻論ナリ禹稷顏回各々其性質ヲ同フシ其氣風ヲ同フシ其才學ヲ同フスルハ易地則皆然ト謂フコトヲ得ベキモ此諸氏ノ性質固ヨリ同一ナルノ理ナシ尙モ其性質同一ナラザルニ於テハ禹ヲシテ顏回ノ時ニ生レシムルモ顏氏ノ如ク一簞食一瓢飲ヲ樂ミテ陋巷ニ潜居スベカラサルヤ必セリ又顏回ヲシテ禹ノ世ニ生レシムルモ多年天下ヲ跋涉シ其門ヲ三過シテ家ニ入ラサルノ甚キニ至ラサルハ亦余カ信スル所ナリ要スルニ禹ハ進取ノ

氣風アリ顏回ハ退守ノ性質アリ兩氏ノ性質斯ク異ナル以上ハ互ニ地ヲ易フルモ其行爲ヲ同フセザルヤ疑ヲ容レサルナリ

第二十二段○萬章篇ニ舜有天下也孰與之曰天與之トアリ是ノ言至テ怪ムヘシ其意舜ノ天下ヲ有ツハ人ノ與フル所ニアラストシテ天ノ與フル所ナリト云フニアリ其天トハ何ヲ指スヤ末章ニ至テ之ヲ觀ルニ人ノ謳歌訟獄スル所ニツイテ是レ天ナリト云フニ過キス然ラハ其天ト稱スルハ人ヲ云フナリ謳歌訟獄スルモノ是レ人ニシテ天ニアラサルハ別ニ證スルヲ要セズ他語以テ之ヲ言ヘハ舜ハ人望ノ屬スル所輿論ノ歸スル所ニ從フテ天下ヲ有ツモノノミ所謂人ノ與フル所ノ天下ナリ然ルニ孟子爰ニ天ノ名ヲ設ケテ舜ノ即位ヲ論シタルハ蓋シ舜ノ徳ヲ形容スルノ方便ニ過ギサルベシ太誓ニ天視自我民視天聽自我民聽トアルモ天ノ視ルハ我民ヲ離レテ別ニ視ルニアラサレハ是レ天ノ視ルニアラスト我民ノ視ルナリ天ノ聽クハ我民ヲ離レテ別ニ聽クヨリ之ヲ見レハ儒書ニ天ト稱スルハ人ヲ指シテ云フナリト知ルヘシ



第二十三段○同篇ノ末段ニ孔子奚取焉取非其招不往也ト云フ意ヲ解スルニ孟子ハ虞人ノ例ヲ舉テ其理ヲ示セリ乃チ曰ク以大夫之招招虞人虞人死不敢往以士之招招庶人庶人豈敢往哉況乎以不賢人之招招賢人乎トアリ其比喻實ニ怪ムベシ賢人ノ招ト虞人ノ招ト同一視シタルハ果シテ何ソノ意ソヤ虞人ノ招ハ法律上定ムル所ニシテ其招ニアラスシテ往キ或ハ其招アルニ往カサレハ其過失ニ應シテ之ヲ罰スルノ定則アリ故ニ虞人其招ニアラサレハ縱ヒ大夫ノ招ヲ以テ招クモ死ストモ敢テ往カサルナリ今賢人ノ招ハ然ラス第一ニ法律上其定則ナキヲ以テ其招ニアラスシテ之ヲ招クモ敢テ罰ヲ受クヘキ理ナシ且ツ天下未タ何ヲ以テ賢人ノ招トシ何ヲ以テ不賢人ノ招トスルノ規則アルニアラス賢者ヨリ之ヲ見テ其規則アリト云フモ世間之ヲ知ラサレハ敢テ其招ヲ用フベキノ理ナシ人知ラスシテ招クニ自ラ不賢人ノ招ナリト云フテ獨リ取ラサレハ果シテ誰レノ罪ソヤ且ツ又賢人自ラ稱シテ賢人ナリト云フモ世間ノ人之ヲ目シテ賢人トナサレハ其ハ縱ヒ其招ヲ知ルモ賢人ノ招ヲ以テ之ヲ招クヘキ理アラザランヤ然ルニ孟子ハ

賢人ノ招ト虞人ノ招ト同一視シタルハ余輩ノ解スルヲ能ハサル所ナリ次ニ欲見賢人而不以其道猶欲其入而閉之門也トアルハ又一僻論ナリ世間ノ人賢人ニ見ヘントスルノ意アリテ其道ヲ知ラス又縱ヒ之ヲ知ルモ世間ヨリ之ヲ見テ賢人ニアラストスルハ之ヲ招クニ其道ヲ用フヘキ理ナシ且ツ其道ヲ以テセザルト其門ヲ閉ツルトハ同一ノ例ニアラサルヤ又明カナリ孟子ノ比喻ヲ設クル大抵皆此類ニシテ事實應同セサルモノ多シ

第二十四段○告子篇ノ初章ニ孟子告子ト性ノ善惡ヲ論シテ如將戕賊杞柳而以爲柶椽則亦將戕賊人以爲仁義與率天下之人而禍仁義者必子之言夫ト曰ヘリ蓋シ告子ノ意人ノ性本ト仁義ナシ師法教育ヲ待チテ而シテ後善人トナルヘシト云フニアリ即チ其意人ヲ戕賊シテ仁義ヲナサントスルニアラス人ヲ教育シテ善人トナサシメント欲スルノミ猶ホ杞柳ヲ矯揉シテ柶椽ヲツクルカ如シ然ルニ孟子之ヲ評シテ天下ノ人ヲ率非テ仁義ニ禍スルモノトナスハ果シテ何ソノ意ソヤ孟子ハ人ノ性本來仁義ヲ有スルヲ以テ其性ニ從ヘハ善人トナルヘシト信シ告子ハ人ノ性本來仁義ナ

キヲ以テ之ヲ教ヘテ善人ニ化スヘシト云フニ氏各其信ス

心ノ同シク悅フ所アリト云フノ斷言ヲ結フベキ理ナシ縱



モ賢人の招ヲ以テ之ヲ招クヘキ理アラシキ然ルニ孟子ハ

ニ從ヘハ善人トナルヘシト信シ告子ハ人ノ性本來仁義ナ

キヲ以テ之ヲ教ヘテ善人ニ化スヘシト云フニ氏各其信スル所異ナリト雖モ其人ヲ導キテ善人トナサントスルノ目的ニ至テハ一ナリ故ニ余信ス二者中一ハ仁義ヲ利シ一ハ仁義ヲ害スルノ別ナキヲ

第二十五段○次ニ人性之善也猶水之就下也人無有不善水

無有不下ト曰フカ如キハ孟子何レヨリ其證ヲ取リシヤ甚

タ怪ムヘシ人性ノ善ナル果シテ水ノ下ニ就クカ如クナル

ニ於テハ其勢自然ニ善人トナリ之ヲシテ惡人トナサシメ

ント欲スルモ殆ント得ベカラザルベキナリ然ルニ人ノ性

皆不善ニ走ラントスルノ傾向アルハ何ソヤ是レ人ハ水ト

其性ヲ異ニスルニアラスヤ

第二十六段○富歲子弟多頼凶歲子弟多暴ノ章ノ下ニ口之

於味也有同嗜焉耳之於聲也有同聽焉目之於色也有同美焉

至於心獨無所同然乎心之所同然者何也謂理也義也聖人先

得我心之所同然耳故理義之悅我心猶芻豢之悅我口トアリ

其意人ノ耳目鼻口皆同シク嗜ム所アルヲ以テ心ニ至リテ

モ亦同シク然ル所ナクバアルベカラスト云フニアリ今假

リニ耳目鼻口皆同シク嗜ム所アリト定ムルモ此論案ヨリ

心ノ同シク悅フ所アリト云フノ斷言ヲ結フベキ理ナシ縱ヒ又其斷言ヲ結フベキ理アリトスルモ共同シク悅フ所理義ノ二ナリト云フノ證ナシ且ツ又理義ノ我心ヲ悅ハシムル芻豢ノ我口ヲ悅ハシムルカ如シト云フノ實事アルヲ見ズ是レ皆論理ノ踈ナルモノト謂フヨリ外ナシ

第二十七段○其次ニ牛山ノ木ノ一例ヲ引キテ人性ノ善ナ

ル所以ヲ論明シタル一章アリ孟子ハ牛山之木本來美ナル

ヲ以テ人ノ性ノ本來善ナルニ喩フト雖モ其譬喩却テ本來

不善ノ理ヲ明示スルノミ今牛山ノ木ノ美ナルハ本來自體

ニ盡ク其美ヲ含有セシニヨルカ又平旦ノ氣雨露ノ養ヲ得

テ生長繁茂セシニヨルカ若シ其外ヨリ養ヲ得テ美大ヲ致

ス者トナスキハ是レ所謂師法教育ヲ待チテ善人トナルナ

リ然ルニ孟子自ラ其末章ニ至リテ苟得其養無物不長苟失

其養無物不消ト説キタルヲ見レハ良心ノ消長ハ外養ヲ得

ルト得ザルトニアリト云フノ意ナリ果シテ然ラハ牛山ノ

譬喩本來良心ノ説ヲ構成スルニ足ラスト知ルヘシ

第二十八段○魚我所欲也ノ章ノ下ニ所欲有甚於生者所惡

有甚於死者非獨賢者有是心也人皆有之トアレ凡ソ人ノ



心其思フ所各々異ナルヲ以テ或ハ生ヲ以テ樂トナスモノアリ或ハ幸福ヲ以テ目的トナスモノアリ或ハ義ヲ以テ道トナスモノアリ是ニ由テ之ヲ推スニ世人皆盡ク生ヨリ甚シキモノヲ欲スルニアラス又死ヨリ甚シキモノヲ惡ムニアラス一簞食一豆羹噉爾トシテ與フレハ受ケサルモノアリ蹴爾トシテ與フルモ受クルモノアリ果シテ然ラハ孟子ノ如ク獨リ賢者は心アルノミナラス人皆之レアリト云フハ亦過言ナリ

第二十九段○舜發於畎畝之中傳説舉於版築之間ト云フ章下ニ天大任ヲ人ニ降サントスルハ必ス先ツ其心志ヲ苦シメ其筋骨ヲ勞ス等トアレハ是レ一ニ天ノ致ス所ト臆定スルヲ要セス苦アレハ必ス樂アリ樂アレハ必ス苦アルハ人世ノ常則ニシテ敢テ之ヲ天ノ定ムル所ナリト云ヒテ怪ムニ足ラス然ルニ孟子ハ世間別ニ怪ムヘキモノアルヲ知ラス即チ終身其心志ヲ苦メテ其樂ヲ得サル者アルハ何ソヤ先キニ苦ヲ經テ後ニ樂ヲ得ルハ天ノ爲ス所ト定ムルハ先後共ニ苦ヲ受ケテ樂ヲ得サルハ何モノ、爲ス所ニ歸スヘキヤ二者共ニ天ノ致ス所ナリト云ハ、天ハ一体ナルカ

二体ナルカノ問難從ヒテ起ラサルベカラズ若シ之ヲ一体ト定ムルハ一体ノ天ニシテ二種相反スル規則ヲ定ムヘキ理ナシ若シ之ヲ兩体トナスハ其各体如何相異ナリ如何相關スルカノ問難又起ラサルベカラズ何レニシテモ天ノ何タルヲ定メスシテ是レモ天ナリ彼レモ天ナリト云フハ論者ノ過失ナリ

第三十段○盡心篇ノ第一章ニ盡其心者知其性也知其性則知天矣ト曰ヒテ性ノ本体天ヨリ來ル所以ヲ説クト雖其性ト天トノ關係ノ如キハ臆斷ヲ以テ定メタルノミニテ固ヨリ實驗明證スルニアラス且ツ其天体ノ何タル所以人性ノ何タル所以ヲ明示セズシテ突然其性ヲ知ルハ則チ天ヲ知ルナリト云フノ斷言ヲ下スカ如キハ論理上許サ、ル所ナリ其次ニ至リテ萬物皆備於我矣ト説キタルモ又邈然據ル所ナキヤ必セリスヘテ孟子ノ論ヲ立ツル皆此ノ如ク先ツ提案ヲ臆定シテ後ニ斷言ヲ結ヒ其間論理ノ貫通スルヤ否ヤヲ問ハザルナリ

第三十一段○人ノ良知良能ヲ論スル章下ニ孩提之童無不知愛其親也及其長也無不知敬其兄也ト説キテ親ヲ愛シ兄

ヲ敬スルハ良知良能ノ存スルニ由ルナリト定ム然レハ世

盡ク其章ヲ掲ケテ一々之レカ批評ヲ下サ、ルナリ之ヲ要



ヘキヤニ者共ニ天ノ致ス所ナリト云ハ、天ハ一体ナルカ

知愛其親也及其長也無不知敬其兄也ト説キテ親ヲ愛シ兄

ヲ敬スルハ良知良能ノ存スルニ由ルナリト定ム然レモ世  
界ノ廣キ人民ノ多キ孩提ノ童ニシテ其親ヲ愛スルヲ知  
ラザルモノナキニアラズ長スルニ及テ猶ホ其兄ヲ敬スル  
ヲ知ラサル者ナキニアラス若シ人果シテ學ハズシテ能  
クシ慮ラスシテ知ルベキニ於テハ長スルヲ待タズシテ其  
兄ヲ敬スルヲ知リ孩提ニ達スルヲ待タズシテ其親ヲ愛  
スルヲ知ルヘキナリ然ルニ之ニ反シテ人ノ知能ハ教育  
ニヨリテ發達スルハ人生レナカラ知能ヲ有セサルヲ以テ  
ナリ

第三十二段○孟子楊墨ヲ論シタル中楊子取爲我拔一毛而  
利天下不爲也墨子兼愛摩頂放踵利天下爲之ト曰ヒテ二氏  
ヲ嘲笑スルノ如ク甚シキニ至ル是レ余カ第十六段ニ論セ  
シ如ク孟子ノ僻見ト謂ハサルヘカラス楊墨ノ主義此ノ如  
ク甚シカラサルハ已ニ明カナリト雖モ孟子ノ僻タル寸分  
ノ事アレハ之ヲ丈尺ニシ十百ノ事アレハ之ヲ千萬ニス楊  
墨ヲ惡ムノ極此ニ至ルナリ  
第三十三段○其他孟子ノ論中難破スベキ點至テ多シト雖  
モ其過失大抵以上舉クル所ノ種類ノ外ニ出テズ故ニ余ハ

盡ク其章ヲ掲ケテ一々之レカ批評ヲ下サミルナリ之ヲ要  
スルニ孟子ノ論理不當ナル點ハ先キニ已ニ述フル如ク第  
一ニ其論大抵假定臆斷ニ出テ、一モ論據ヲ舉ケテ證明セ  
シモノナシ第二ニ論理ノ平稱點ヲ失シテ一端ニ偏倚スル  
ノ僻アリ第三ニ事實ト比喻ト相應セサルノ過失アリ是レ  
余カ孟子ヲ目シテ論理ヲ知ラスト稱スル所以ナリ然レモ  
余固ヨリ知ル此ノ如キハ孟子ノ罪ニアラサルヲ其源因ヲ  
尋ヌルニ第一ニ當時百般ノ理學未タ開ケサルヲ以テ歸納  
上論礎ヲ構成スル能ハス第二ニ其論ヲ立ツルノ本意時弊  
ヲ矯正スルニアルヲ以テ自然ノ勢論理ノ點ヲ失シテ一端  
ニ偏倚セサルヲエサルニ由ルナリ故ニ其時ノ事情ト其人  
ノ本意トヲ酌量スレハ孟子ノ論決シテ難破スヘキニアラ  
サルナリ然リ而シテ今日ニアリテ之ヲ視レハ其論理ニ過  
失アルハ孟子ノ缺點タルヲ免レス後ノ孟子ヲ讀ムモノ其  
缺點ノ缺點タルヲ知ラスシテ妄リニ其説ニ倣フテ論ヲ立  
ツルニ至ラハ當ニ其人ニ益ナキノミナラス永ク其誤ヲ後  
來ニ傳フルヤ必然ナリ故ニ余ノ孟子ヲ可否スルハ其意孟  
子ヲ可否スルニアラスシテ今日孟子ヲ讀ンテ之ヲ可トス



ルノ者ヲ可否スルニアリ且ツ夫レ余カ論中孟子ニ反對シ  
 テ勝敗ハ人カノ能ク動カス所ニアラスト云フモ又良知良  
 能ヲ排シテ人ノ性本來不善ナリト云フモ其意孟子ノ論一  
 端ニ僻スル所アルヲ以テ姑ク其他端ヲトリテ論スルニ過  
 キス故ニ此ノ如キハ固ヨリ余カ本論ニアラサルナリ讀者  
 併セテ之ヲ諒セヨ

(畢)

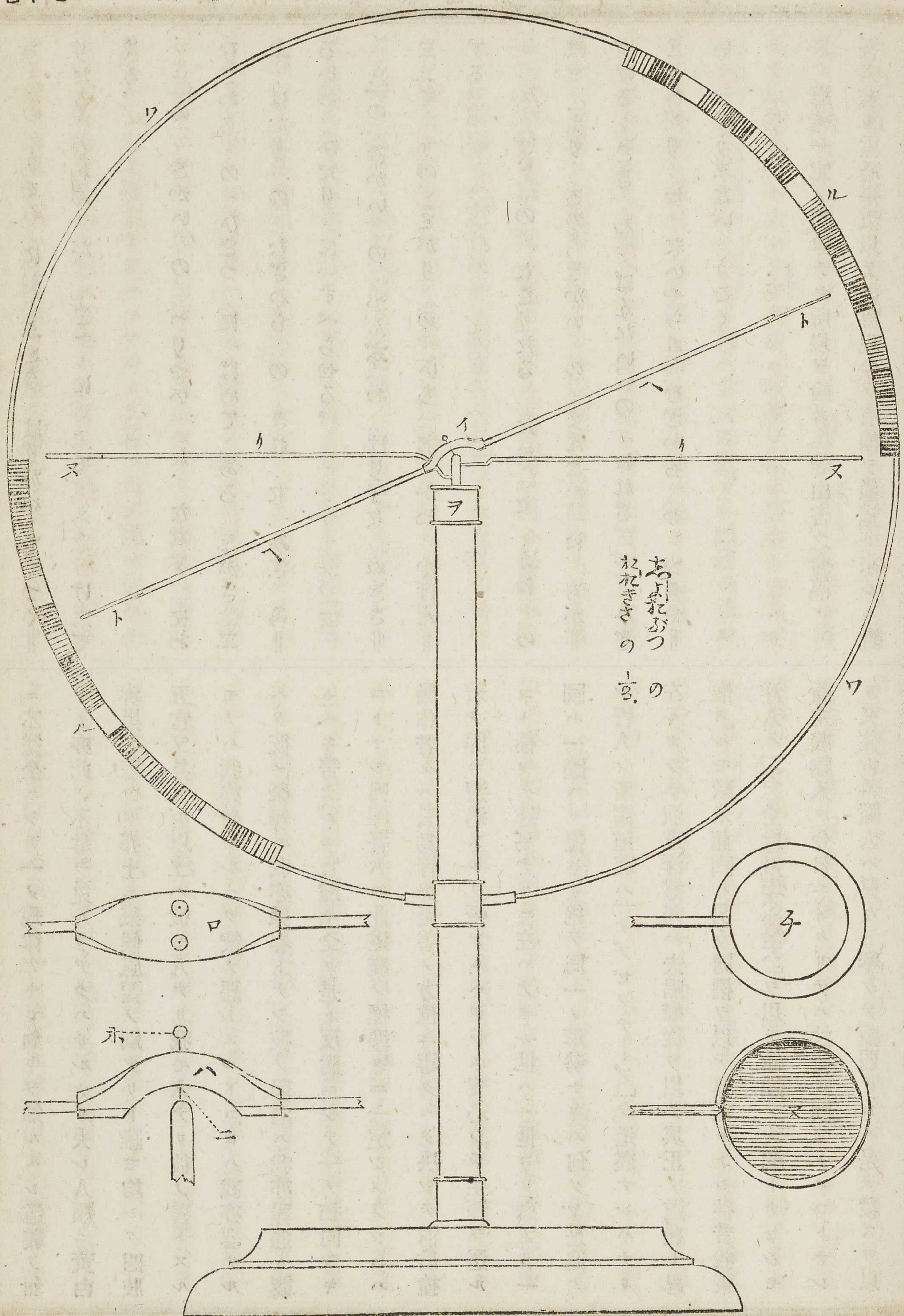
てんびんはれきけい。

ごま。

この きかい わづ に あらわさて ある とれり  
 の もの にて これぎ に もちいて べんりなる  
 もの なり。 イ わ こるく にて つくり はま  
 の ごとき かたち ね なす、 ロ ハ わ りの  
 志よれぶつ の ねれきさ ね あらわあたる なり。  
 この こるくの まんなか にわ みまかく ねり||  
 たる はりが 二 ほん ならべて ささて ある。  
 ホ わ なんきんだま にて はりの ねれたる  
 はま ね さま すいくわん で ねつさて とめたる

もの なり。 へ へ わ むぎわら なり。 ト ト  
 わ うすく へぎたる こるく で つくつた わ に ||  
 て あかく りめたる もの なり、 チ わ りの  
 志よれぶつ の ねれきさ なり。 リ リ わ まん ||  
 ちゆう の はりがね にて りの はま わ こるく  
 の わ と ねなま さまわたま の まるいた に  
 なつて れる。 この はりがね の ひだりに  
 ある もの わ みぎの もの より すこま た ||  
 かく へ へ が すい へい の いち に ある と ||  
 きわ みぎの もの わ りの また に あり  
 ひだりの もの わ りの うね に ある よれ  
 に なつて れる。 また この はりがね の つ ||  
 けぎわ わ こるく に さわらぬ よれ に まげて  
 ある。 こるく ね さまたる 二 ほん の はり  
 の とがりの の つて れる ところ わ ごく あ ||  
 ささく ぼみ に なつて れる。 ル ル わ い ||  
 ろどり ね なまたる ぶもり にて ワ なる た ||  
 け にて つくりたる わ に つけたる もの なり。





高ぶつ  
ねたぎの  
1/2の

は志  
江さ志  
すいくわん  
でねつ志て  
とめたる  
けにて  
つくりたるわ  
につけたる  
ものなり。



ヲのうゑろにわふときはりがねでつく  
りたるくわんがよこに志てるれづけ志て  
ある。

このきかいのつりやいれなれすにわ  
むぎわらのひとつにはめてあるながさ二  
ぶばかりのむぎわらのきれれみぎあ  
るいわひだりにすべらせる。

このきかいのかんぢわはりれぬきさ  
ゑあてりのとがりのいちれかにかげん  
する。

はれきこのきかいのまんなかはちが  
づけるときわはんたいのはれきがみぎ  
とひだりはれいやられむぎわらわつりや  
いれうゑないうごく

○ 道義一定ノ規律ナキ所以ヲ論ス 寺山啓之助稿

吾人若シ虚心平氣以テ社會現今ノ有様ヲ通覽シ來レハ實

ニ不完全ニシテ一ノ規律ナキカ如キヲ知ルヘシ道義ノ如  
キモ亦此ノ不幸ヲ免ルルアタハサルナリ夫レ人類ニ黃白  
赤黒ノ差アリ邦土ニ氣候風習ノ別アリト雖モ均シク四肢  
五官ヲ具フル以上ハ彼モ人ナリ我モ人ナリ彼ノ善トスル  
モノハ我亦善ナルヘク彼ノ惡トスルトコロハ我亦惡ナル  
ヘク彼ノ榮譽ハ我亦榮譽トナシ彼ノ罪過ハ我亦罪過ト認  
ムヘキ筈ナルニ實驗上全ク是ト反對ニシテ一ノ相同シキ  
コトナシ嗚呼吾人ハ此道義ノ標準タニ一定シタランニハ  
動作若クハ云爲皆ナ至善ノ方位ニ導クヘク決シテ前後撞  
着ノ弊ニ遭遇スルノ憂アルヘカラス安心シテ生涯ヲ送ル  
コト極メテ容易ナルニ左ハナク一世ハ一世ヨリ殊ナリ一  
國ハ一國ヨリ變ハリ絶テ同一ノ形勢ナキハ何ソヤ是他ナ  
シ吾人ノ所謂道義ハ「サブセグチーブ」ノ道義ナレハナリ  
左ルカラニ我東洋諸邦ハ夫唱婦從ヲ以テ眞正ノ道義ト思  
惟スルモ歐米諸國ハ男女同權ヲ以テ眞理トナシ往昔我東  
洋人ハ「君父之讎俱不戴天」ヲ以テ倫理ノ大綱トナセシモ  
新主義輸入ノ今日ニイタリテハ法律ノ問フトコロトナレ  
リ又往古希臘人ハ兒女ヲ擧ケテ羸弱ナレハ是ヲ殺スヲ以

テ國家無二ノ經濟トナセシト云ヒ支那ニ於テ亦生兒ヲ溺

方ヲ確定セサルヘカラス天下焉ソ斯ノ如キ理アラシヤ



吾人若シ虚心平氣以テ社會現今ノ有様ヲ通覽シ來レハ實

リ又往古希臘人ハ兒女ヲ擧ケテ羸弱ナレハ是ヲ殺スヲ以

テ國家無二ノ經濟トナセシト云ヒ支那ニ於テ亦生兒ヲ溺死セシムルノ慣習行ハレシトイヘリ其他マレイ人種ハ海賊ヲ以テ榮譽トナシダク人種ハ暗殺ヲ以テ祭事トナシダマルス、ホツテンドット一族ハ男女老耄シテ職務ヲ執ルアタハサルニ至レハ之ヲ殺シ若クハ山谷ニ驅ツテ餓死セシムルノ習アリト云ヘリ其他此ニ類スルノ事實ハ實ニ夥多ニシテ殆ント枚舉ニ暇アラス皆道義ノ汎濫極リナキ確証ニシテ時ノ古今世ノ文不文洋ノ東西等ニ因リ變異不同ニシテ論理ノ一定ハ決シテ成立スヘカラサルノ理ヲ知ルヘシ然ルニ古今ヲ亘リテ道義ノ一定不變ヲ論スル者尠カラス殊ニ支那ニ於テ探討セハ此種ノ論者極メテ多カルヘシト雖余ハ煩雜ヲ避ケンカ爲メ暫ク之ヲ略シ西洋二三ノ學者ノ定見ニ就テ抄シク辨駁スルトコロアラントスアリストール氏曰ク「道義ハ時日ヲ逐フテ變更スル者ニアラス」ト抑モ氏ハ如何ナル論法ニヨリテ斯クハ斷定セラル、者カ疑ナキアマハサルナリ若シ氏ノ說ニ從ハ、往古ノ道義ヲ是ナリトシ現今ノ道義ヲ非ナリトセンカ將タ東洋ノ論理ヲ非トシ西洋ノ論理ヲ是トセンカ兎ニ角一

方ヲ確定セサルヘカラス天下焉ソノ斯ノ如キ理アラシヤ庶幾クハ淺見妄想ノ嗤ヲ免カレサラントス余又曾ツテ學藝志林ヲ繙キシニ東京大學御雇教師タリシシ、セー、グパー氏トナン云ヘル學士ノ倫理ニ關スル論說アリキ全文ノ結構ハ今全ク忘却セシカ僅カニ其一節ヲ記臆セリ同氏曰ク世間動モスレハ粗暴ノ見解ヲ下シテ曰ク凡ソ理想ハ國ニ隨ツテ同シカラス道義モ亦汎濫極マリナシ故ニ是非善惡正邪ノ如キハ原ト分別スヘカラスト余ヲ以テ之ヲ見レハ此說ハ毫モ力ナキノミナラス反ツテ是ニ因リテ道義ノ講セサルヘカラサル所以ヲ確認スルナリ假令蕃民カ人肉ヲ啖ヒ復讎ヲ歎賞シ淫蕩ヲ榮譽トスルノ風習ヲ有スルモ豈ニ道義ナキノ憑証トナスヲエンヤ蓋シ蕃民カ兇惡ニシテ道義ナキハ天地ノ間ニ道義ナキノ憑証ニアラス蕃民獨リ道義ナシ故ニ蕃民ナルノミ是ニ因リテ之ヲ見レハ氏ノ論議ハ全ク道義ニ一定ノ規律アル所以ヲ論シタルモノ、如シ故ニ余ハ少シク辨駁ヲ費



サ、ルヲ得スト雖此惜哉斯文全体ノ結構ハ既ニ忘却シタルヲ以テ一々駁撃ヲ試ムル能ハス余ハ唯此ノ一節ニ就テ已ニ業ニ自家矛盾ヲ來セル所以ヲ指摘シテ満足スヘキ也此篇先ツ一論者ヲ假定シ而シテ氏カ其ノ論點トスル所ヲ駁撃非難セシ者ノ如シ而シテ余ハ殊ニ此論者（氏カ假定シタル一論者ヲ指ス）カ論據トスル點ヲ思惟スルニ只理想道德ナルモノハ一定ノ規律ナク世ノ如何時ノ如何邦土ノ如何等ニヨリ漠然定マリナシト云マテニシテ決シテ蕃民カ酷薄ナル風習ヲ有スルハ道義ナキ所以ナリトハ説カサルナリ却テ野蠻ハ野蠻ニ適スルノ道義アリ文明ハ文明ニ適スルノ倫理アリト云フノ意ヲ胚胎ス氏ハ此説ヲ排斥スルニ正當ノ理論ヲ以テセス忽チ「蕃民カ人肉ヲ啖ヒ復讎ヲ歎賞シ淫蕩ヲ榮譽トスルノ風習ヲ有スルモ豈ニ道義ナキノ憑證トナスヲ得ンヤ」又「蕃民カ兇惡ニシテ道義ナキハ」杯ノ形迹ナキ文字ヲ用ユルハ何事ソヤ眞ニ冥々裡ノ爭鬪ト云ハサルヲエス少シク意ヲ注イテ見ルトキハ論法ノ不完全ナルコト明々白々タリ然レ此ノ文章ハ某氏ノ譯述セシモノニ如シ故ニ或ハ氏ノ意ヲ誤譯セラレシ者

ナランカ非カ兎ニ角余ハソノ原文ヲ見サレハ明瞭ナルコトハ得テ知ラサルナリ次ニ「蕃民獨リ道德ナシ」トハ果シテ何人カ定メラレタルニヤ此等ノ事ハ道義ノ標準カ一定シタル后ニコソ知ルヘケレ苟モ變遷不定ナル以上ハ決シテ判然セサルモノナリ蕃民ノ道義トスルモノハ唯我々文明人ノ不道德トスルノミニシテ彼レ必ス以テ真正ノ道德ト思惟スルナラン生兒ヲ溺死セシメ老耄ヲ餓死セシムル等ハ吾人ノ聞クヲ愧ヅル所ナリ然レ此レ之ヲ行フテ意トセス人亦以テ尤メス以テ天下ノ公道ヲ認ムルナラン試ミニ吾人ノ道義トスルトコロヲ以テ彼ニ示セヨ彼笑フテ以テ道義ニ非ラスト云フヤ必セリ焉ソ蕃民獨リ道德ナシト妄断スルヲ得ンヤ斯ク論シ來レハ氏必ス辯護シテ曰フナラン蕃民ノ道義トスルトコロハ進化ノ理ニヨリテ漸々消滅ニ歸スル者ナレハ真正ノ道德ニアラスシスト果シテ然ラハ氏カ至善ナリ至正ナリト思惟スル道義モ亦真正ノ道義ニアラスト云ハサルヲ得ス如何トナレハ同シク進化ノ理ニヨリテ千百年ヲ經過セハ不道德トナルヤモ測知ルヘカラサレハナリ

余ハ前段ニ於テ思ハス論鋒ヲ極端ノ位置ニ使用シ枝葉瑣

ヲ享有セント欲スルノ心情若クハ行爲ハ已ニ業ニ發生シ



ノ譯述セシモノ、如シ故ニ或ハ氏ノ意ヲ誤譯セラレシ者

ルヘカラサレハナリ

余ハ前段ニ於テ思ハス論鋒ヲ極端ノ位置ニ使用シ枝葉瑣末ノ事ヲ紛爭シテ他人ノ意志ヲ臆測スルノ誹誣ヲ免カレサラントス蓋シ余カ甘ンシテ此ノ如キ枝論ヲ喋々シテ一身ノ誹誣ヲモ顧ミサル所以ハ他ナシ讀者ヲシテ敵手論相ノ一班ヲ知ラシメント欲スルノ微衷而已元來倫理一定論ヲ唱フル者獨リ前顯ノ二士ニ止マルニアラス天下滔々其人ニ乏シカラスト雖モ到底確乎タル不定說ヲ傷クルアタハサルカ如シ源ヨリ斯ク牽強附會ノ說理ニ満足セサルモ他ニ明々白々タル理論ノ以テ道義不定ヲ証明スヘキ者アリ以下論鋒ヲ轉シテ專ハラ理論上經驗上ヨリ直ニ余カ大眼目トスル点ニ進行檢覈スヘシ

道義ノ本元ハ人類固有ノ愛情ニ起因セリ他語モテ之ヲ言ヘハ道義ハ愛情ノ動作云爲ニ發表シタル者ニ他ナラス愛情茲ニ有リ故ニ道義生ス蓋シ道義ト愛情トハ前後左右相連接シ并屬シテ毫モ離隔スヘカラサルモノナリ太古矇昧野蠻ノ時人類ノ初メテ他族中ヨリ分離獨立スルヤ心機ノ作用未タ銳敏ナラス萬般ノ嗜慾亦澁滯浚漫ヲ免カレスト雖モ少クトモ自己ノ身體ヲ愛眷シテ永久生存シ永久快樂

ヲ享有セント欲スルノ心情若クハ行爲ハ已ニ業ニ發生シタルニ相違ナシ仮令此種ノ生民ハ大抵完全無疵ノ籌策ヲ以テ充分身體ヲ擁護シ得ルノ智力ニ乏シク多クハ殘酷ナル生存競争ノ手段ニ出テシコトナラント雖モ又叨リニ靜穩ノ所爲ニ出テシコトナシト斷定スヘカラス是即チ道義ノ萌芽ナリ濫觴ナリ道義ノ元子ハ實ニ此点ニ胚胎スル者ナリ而シテ一旦人類ノ意識内ニ發生シタル作用ハ心性遺傳ノ元則ニ因リ漸々父ヨリ子ニ遺シ子ヨリ孫ニ移リ孫ヨリ曾孫玄孫ニ傳ヘ逾々遺傳シテ益々進化ノ度ヲ加ヘ自愛化シテ愛他トナリ自利變シテ利他トナリ終ニ他人ノ危窮ヲ見テ恰モ自己カ受ケタル苦痛ノ如ク思惟シ或ハ兒子ノ并ニ落チントスルヲ看テ思ハス惻隱ノ心ヲ生スルカ如キ吾人ノ曾ツテ期セサルトコロノ性情ヲ成鑄スルニ至ル是ニ於テ道義ノ範圍次第ニ濶ク同時ニ汎濫不定ノ結果ヲ現出スル者ナリ

右ハ余カ平素道義ノ起源ヲ論スルノ大要ニシテ結局道義ナル者ハ元子ヲ人類固有ノ愛情ニ資リ更ニ進化ノ理ニ據リテ年々歳々其範域ヲ廣メ遂ニ漠然不定ノ面相ヲ呈出ス



ルニ至ルト云フニ過ス今ヤ此説ヲ確メンカ爲メ愛情其者ハ果シテ人類ノ固有ナルヤ否ヤト云フ問題ニ遭遇セリ然レ之ヲ証明スルハ最ト容易ナレハ余ハ單略ニ陳述セント欲ス夫レ人類ノ本性トシテ共居交接スルヲ樂ミ獨坐寂寞タルヲ悲マサル者アラス古哲ブレート氏カ二千有余年前ニ於テ「人類ハ交社ノ動物ナリ」ト陳ヘタルモ畢竟此ノ旨趣ニ外ナラス而シテ之ヲ勸誘シ及ヒ此期望ヲシテ満足セシムルノ道路ハ只相互ニ愛シ相互ニ戕ハサルノ愛情ニ起因スト云フノ他毫モ他ニ求ムヘキ者ナシ嗚呼此愛情タル吾人ハ他ヨリ教ラレタルニモアラス又自ラ習フタルニモアラス不思不識ノ間ニ偶然發表シタル固有本性ノ形迹ナリ左レハ此點ニ於テハ古人モ今人モ蕃民モ文明人モ同途同轍ナルコト毛頭疑ヲ容ルヘカラス道義ノ萌芽ハ實ニ此愛情ニ起因ス故ニ宇内ヲ舉ツテ同一ナルコト尙ホ愛情ノ如クナルヘキ筈ナレト一般吾人ノ所謂道義ハ單ニ道義萌芽ヲ稱スルニ止マラス之ヨリ進化脱却シテ一箇ノ体形ヲ形造リタル者ヲモ并括シテ呼フモノ、如シ即チ殊更ニ條項ヲ正フシテ吾人ノ遵守スヘキ者ハ如斯如斯ナリト命令ス

ル者ヲ云フ是決シテ社會全部ニ行ハル可キ者ニアラス又萬世ヲ支配シ得ル者ニアラス余カ題言ニ於テ道義一定ノ規律ナシト疾呼シタルモ畢竟道義体形ノ變遷極リナキヲ云フ義ニシテ道義体形ノ如何ヲ論スルハ此篇ノ本旨ナリ蓋シ道義体形ト起源ハ何時代ナリシカ余ハ之ヲ確知スルニ由シナシト雖モ熟々思考ヲ廻ラセハ人智稍々發達シタルノ時ナラサルヘカラス太古荒鴻ノ生民ハ人爲物ニ刺撃セララル、コト尠ナク唯僅カニ天然物即チ日光寒熱風雨山川艸木等ノ刺撃ニ遭遇スルコトアルノミナレハ心機ヲ組織スル三能力即チ情智意ノ作用未タ英敏ノ點ニ達セス生活ノ狀態毫モ他族ト異ナルコトナシ此時ニ當リテハ道義萌芽ノ發生シタルマテニシテ所謂道義体形ナルモノナシ何ントナレハ体形其者ヲ構造スルノ智力ニ乏シケレハスルノ智力ナケレハナリ嫁娶ノ禮ナク人類一家族ヲ組成セス夫婦父子兄弟姉妹ノ未タ判然タラス此時ニ當リテハ道義萌芽ノ發シタルマテニシテ所謂道義体形ナルモノナシ何ントナレハ体形其者ヲ構造スルノ智力ニ乏シケレハナリ世運稍々進歩シ人類稍々増殖スルニ至リ生民各自カ

過去ノ經驗ト心性ノ遺傳トニ因リ動作云爲ノ利害ヲ測知

當時ノ社會ニ適合シ生民ノ便宜ニ關係スル動作云爲ヲ以



過去ノ經驗ト心性ノ遺傳トニ因リ動作云爲ノ利害ヲ測知シテ不知自然ノ間ニ各自箇々ノ幸福ヲ増進シ若クハ社會全体ノ公安ヲ擁護スルノ動作云爲ヲ以テ道義トナシ吾人各自ノ幸福ヲ壓抑シ若クハ社會全部ノ公安ヲ防遏スルノ動作云爲ヲ以テ不道義ト爲シタルヨリ(約言スレハ便宜ト云フ一点ヨリ)道義ノ体形初メテ成立シタルナラン或ハ然ラスシテ智力者一箇ノ意匠ニ因リ道義体形ヲ養成シタル社會モ亦尠カラサルベシ抑モ野蠻社會ニアリテ少シク智力ヲ有スル者ハ大ニ社會ノ信用尊敬スルトコロトナリ萬事其智力者ニ諮問シテ最后ノ決斷ヲナス等ノ事情アリ者ナリ今日片田舎ニ於テ結婚離姻ノ可否ヲ學校教師ニ謀ルカ如キ亦此点ニ外ナラス是ニ因リテ之ヲ見レハ往古智力者カ蕃民ニ向ツテ彼レハ惡ナリ爲スヘカラス是レハ善ナリ宜ク行フヘシト誘導シ履行セシムルハ甚タ容易ノ業ニシテ敢テ一人ノ不服ヲ唱フル者ナキノミナラス却ツテ欣喜ノ情ヲ露ハセシナラン如何トナレハ此計畫ハ蕃民各自ノ利益ヲ増進スルニ他ナラサレハ也余ハ斯ク論シ來ルモ決シテ完全無欲ノ道義ヲ造出セシト云フニ非ラス唯

當時ノ社會ニ適合シ生民ノ便宜ニ關係スル動作云爲ヲ以テ道義ト爲シタリト説キシ而已或ハ社會ノ進化變遷スルニ從ヒ便宜一變シテ禍害トナリ甚シキハ慘憺タル腥血ヲ飛ハスカ如キ不幸ヲ現出スルニ至ルコトアリ是レ數ノ免カレサルトコロナリ

○ 通俗ダルクウヰン進化の理

余近頃獨逸ブフェル氏の通俗講談に係る「ダルクウヰン」の「テフラー」と題せる書と讀みしヨリ行文平易余此如き該學に未だ遠からざる者と雖も其理の要領を解するを得たり故に今之を抄譯し通俗「ダルクウヰン」進化の理と題し貴社に投す幸に餘白に填せらるゝの榮を得はありがたし然れども恐くは編者は斯くいふならん此の如き劣敗文は自然淘汰にあらざるも編者自ら淘汰して化石の埋没するか如く紙屑籠の中ニ没せしめんと

駿臺 霞城山人 稿

東西南北何れと問はず我々の歩して到る處の地の下には



此人類の未だ出現せざる遠き古代にはやく此に棲息し生存を競争し今は全く滅亡したる數百萬の生物の墳墓あらざるなき何となれば其證話たる化石即ち生物の形態は石質に變化したるものありて何れの地層にも之れを含まざるのなきかゆへなり曾て「ピロン」といへる人曰く我々れ脚下に亂るゝ風塵は曾て生活せしものなりと誠に格言と申すべし化石は古代の人と雖も深く奇として其由來を推考したれとも一ツも正當なる判断を下す能はず造化の戯れよ地下土石の間に於て地上の生物と摸擬せんとし此様なる奇怪のものを造れりと妄信せり夫より降りて中古に至るも學問未だ開けず真正の智識を欠きたれハ「マンムート」といふ古象の大なる骨片を見て太古地上に住居せし大恠人の骸骨なりと信せり千八百二十年に近代に及びても法王の侍臣なる「ツァムボニ」氏は羅馬に於て公衆に對し古生物學の信用すべからざることを演説し化石は全く造化力の嬉戯より成るものにて決して前世界生物より由來するものにあらずとせり然れども既に古代に二三の卓見家なかり志にあらず當時

疾くに其由來と察志道理を適せる説をなせり就中希臘「コロフツァン」の哲學家なる「キセノファテス」氏の二千四百年以前に於て既に化石は前世生物の遺骸なりとし往々峯頭より産する海棲貝殻及び「シミルナ」「ハロース」「シラクス」希臘地名の岩中に含在する魚族鰭脚獸類の痕跡に就き允當なる論を下し此地は住古海底たりしか故に此の如き毛族潜類の化石ありといへり又羅馬の詩人「ユフヒド」氏も書を著して海陸の古來變遷したる事を掲げ今日海を距る遠き處より貝殻を出すの理を説けり

右の如く古代に於て既に化石の由來を論説したる人なきにあらずれとも其眼光は未だ眞理の蘊奧を看破し得ざりき是れ他にあらず此の如き不可思議なる隱語ナドと解くの金鑰の獨り實驗上の智識なるに古代の人ハ此の智識に乏しく從て眞理に適せる觀察を下す能はずりよによる其後漸く學術進み智識開らけたりと雖も彼の名高き博物家「クフェル」氏の世に現はれ古生物學の基礎を立てしは纔に前百年紀の末より當百年紀の初に至るの間なれハ此學問は誠に幼稚たるを免れず是より進て大成の域に達せん

とするものなり即ち博物家「アガシツ」氏の語を以て之を

今日既に發見したる古生物は多しと雖も之を以て古生物



然れども既に古代に二三の卓見家なかり志にあらず當時

とするものなり即ち博物家「アガシツ」氏の語と以て之を証するに足る其語に曰く

化石は曾て地上に生活したりし動植物の遺骸なる事實を明かにせんか爲め古來幾何の耐忍と幾何の刻苦とと費せしかは獨り此學問の沿革に通したる人にして始めて始て之を知ると得へく之を知るの人にして始めて化石ハ一時學者輩まで妄信せしか如く「モーゼス」教派の所謂翦滅洪水の殘敗物にもあらざることを知るを得へし「リッフェル」氏出て、化石ハ實に動物の遺骸なれとも此動物ハ今ハ既に滅ひて地上に此種のもれと見ずといひ以て古より人の胸中に存したる疑團を一掃したる後初めて此學問の基ハ堅固なるを得たり然れども猶他に問題の未だ其疑の解けざるもの多し此問題ハ實に我々現今の學士が日夜刻苦して解譯を得んと熱望する所にて今の世界ハ古の世界と事變はり未曾有の新事業多きか爲め多數の發見物もありて大ひに此學問の進歩を促かせり就中鐵道布設道路開通外國漫遊の如きは種々發明の偉功を奏せしめたり

問は誠に幼稚たるを免れず是より進て大成の域に達せん

今日既に發見したる古生物は多しと雖も之を以て古生物の全數と悉したりと信するは大ひなる誤見なり纔よ其一小部分を得たるのみ古生物ハ非常に多く存したれとも地下に埋没するが爲め殆んど皆形体を失へり殊に柔軟動物の如き自家の性質久存に耐へざるものは論なく他の動物と雖も軟質の体部ハ皆然りとす故に此れ如き動物の化石と得るは極て稀にして唯得る所のもの多くハ貝殼骨片毛羽齒爪足跡を印する石及ひ糞塊の石化せるもの、類に止まれり古生物に就て得る所のものハ纔に此れ如し而して此に推考と下し古代ハ生活せし動物の形狀及ひ性質と判斷せざるへからず古生物學の至難なること想ふへし然れとも稀れには古生物の完全なる骨骸を得るとあり尙稀れには偶然の事よりして皮肉共に存するものを得るとあり例へは琥珀及ひ石鹽中に封せられ數千年を経て今日まで姿体を存する無血蟲及ひ植物の如き其他西比利亞の「マンムート」も此一例なり蓋し此古象を得たるは古生物學の一大奇事とも稱すべく又一重大發見とも稱すへし何となれハ皮膚毛髮より臟腑其他の機關に至るまで形質を變



せずまで存したるのみならず其胃中にて曾て食したる餌食を留め肉の一部は死後數千年を経たるも腐敗せず猶食するを得て實に世界の人を驚かしめたれなり

右の如く古代に奇異なる大獸を生時其儘の姿にて之を今日に得たるハ不可思議の事なれども其實決して左にあらす此地の曾て泥澤なりし時「マンムート」ここに陥り死後堅氷の之れを封合したるか故に表皮筋肉も腐爛せず數千年を経たるものなり然れども愚昧なる蠻民は固より此の如き理を解し得ざるを以て妄に笑ふべきの説をなせり即ち西比利亞遊牧民の説に従へば此怪獸は地下に生活する土發鼠にして常に土を撥て往來し世界の光明に觸るゝ時は忽地に其命を墜すといひ又北亞細亞の支那人も同一の妄想を懷き且つ世に地震あるは此動物の地下に在て動くより來るものとせり

(以下嗣出)

理醫學講談會筆記

講談ノ席上ニ於テハ標品圖畫等許多ヲ示メサレタ  
レ印印刷ノ都合ニ由リ今其中ヨリ一二ノ圖画ヲ擇  
ヒテ茲ニ挿入セリ

編者記

手足説

松原新之助君述

余カ本日講説スル所ハ至テ俗ナルコナレ其段ハ幾重ニモ御免ヲ蒙リタシ今其講談ヲ爲スニ先テ余輩ノ親類ヲ諸君ニ御引合せ申スヘシ蓋シ後ニ引合ニ出ルコト多クレハナリ此者ハ親類中ニテモ遠類ナレモ斯ク顔色ノ赤クシテ奇麗ナルハ他ニ比類ヲ見ス最モ近キ親類ハホル子ヲスマトラ等ノ熱地ノ島國ニ居レリ本日之ヲモ招キテ御引合せ申サント欲シタレトモ道ノ遠キカ故ニ間ニ合ハス

凡ソ動物中余ハ未ダ曾テ手足ノナキモノヲ見ス而シテ手ニハ肩胛上膊下膊及手ノ別アリ又足ニハ骨盤大腿下腿又足ノ別アリ手ハ種々ノ作用<sup>ハタラキ</sup>アルニ到底拇指ヲ他ノ指ニ對向セシメテ物ヲ握ル者ニ足モ亦種々ノ作用アルニ其主モナルハ體ヲ支ヘテ歩行スル者ナリ然レモ此レハ人間ヲ謂フ他ノ動物ハ否ラス殊ニ其下等ナルハ手足ヲ區別スルコト能ハス上等ニ至テ始メテ手ト足トヲ分ヲ得ヘシ今最モ下等ノ動物ヨリ最モ上等ノ動物<sup>即人</sup>ニ至ルマテ順序ヲ逐テ論スレハ渾水中ニ棲息スル最モ下等ノ動物ハ體ノ外面

ニ鬣毛アリ之ニ由テ水中ニ游泳シ又食スヘキ物アレハ之

體ノ各輪ノ兩側ニ四毛ヲ生シ以テ能ク進行ニ便ス以上ノ

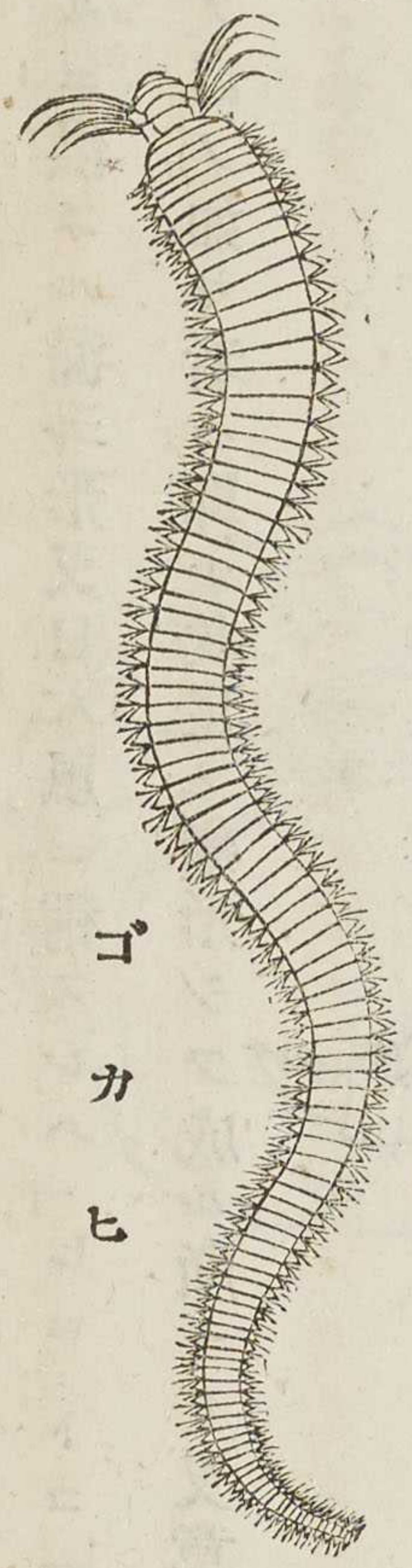


ニ鬣毛アリ之ニ由テ水中ニ游泳シ又食スヘキ物アレハ之ヲ捕ヘ或ハ水中ニ在ル物體ノ上ニ這行ス 第一圖 第一 稍々上等ノ水母珊瑚ノ類ニ至 クラゲ



縁ト其口ノ周邊ニ絲アリ之ヲ用ツテ食スヘキ物ヲ捕ヘ又其絲ノ内ニ含有スル毒液ヲ注キテ刺シ殺ス用アリ珊瑚ハ口ノ周邊ニ絲アリテ同シク近傍ニ在ル食物ヲ捕フルニ便ス是等ノ絲ハ專ラ手ノ用ヲ作スモノト爲ス又進ンテ水蛭蚯蚓ノ類ニ至レハ水蛭ハ足ニ代リテ體ノ前後ニ吸盤アリ之ニ由リテ身體ヲ前進シ蚯蚓ハ體ニ二十九乃至三十八ノ輪アリ各輪八本ノ硬毛アリ共ニ其前進ヲ扶ク ゴカヒ

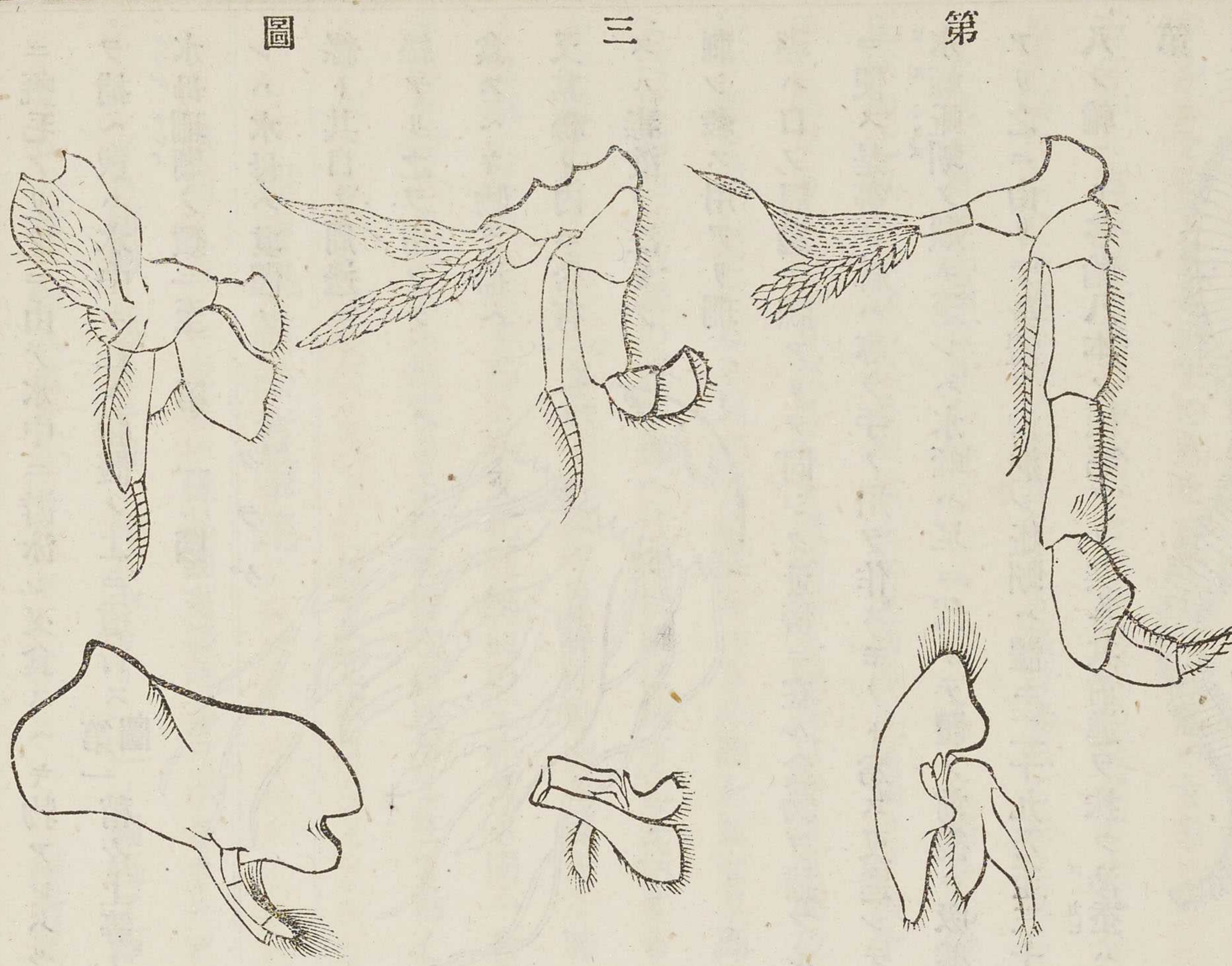
第二圖



體ノ各輪ノ兩側ニ四毛ヲ生シ以テ能ク進行ニ便ス以上ノ動物ノ足ニハ尙ホ關節ヲ缺如ス 第二圖 又進シテ アハチトシボカニ 蛇蜂蜻蛉蟹蝦ノ類ニ至レハ蝦ノ最前部ノ足ハ缺ト成リテ手ノ用即チ物ヲ攪ムニ供ス且一側ノ缺ノ頗ル大ナルモノアリ是ハ交接ノ其雌ヲ抱クニ要ス胸部ノ足ハ水底又ハ陸上ニ歩行スルニ便シ腹部ノ足ハ翻々トシテ水中ニ游泳スルニ適ス蛇蜂蜻蛉ノ類ノ足ハ人ノ足ニ類セル四部ヲ具ヘ專ラ歩行ニ用アリ尙ホ進ンテ介類ニ至レバ「バカ」ハ雙殼類 二片ノ フル中馬鹿ニ大ナル足ヲ具フル者ニシテ 長キ舌ノ様ナル モノノ杲然ト口ヲ明キテ舌ヲ出セル 足ヲ出ス恰モ痴 ガ如シ故ニバカト稱スルナランカ之ヲ以テ能ク水中ニ游泳ス蝸牛ノ足モ亦能ク這行ニ便ス章魚烏賊ノ足ハ頭ニ生シテ物ヲ攪ムハ手ノ用ヲ爲シ水底ヲ這フキハ足ノ用ヲ爲セリ以上論スル所ハ皆大概足ト手トノ別アルカ如キ者ナリト雖モ未タ十分ノ分界ヲ爲スヲ能ハス而シテ此手トモ足トモ云フヘキ者ハ時トシテ變形シテ他ノ用ヲ爲スヲアリ其例ハ甚多シト雖モ今僅カニ其著ルキ者一二ヲ舉クヘシ蝦蟹ノ口ハ數多ノ變形シタル足ノ聚合ヨリ成リ 第三章 魚ノ漏斗ト稱シテ體內ニ入りタル水ヲ吐出シ又卵ヲ産出



スルニ供スル漏斗形又日本風ニ稱スレハ「ヒョットコ」ノ  
面ノ口ノ如キ者ハ即チ其足ノ變形シテ成ル所ナリ又章魚

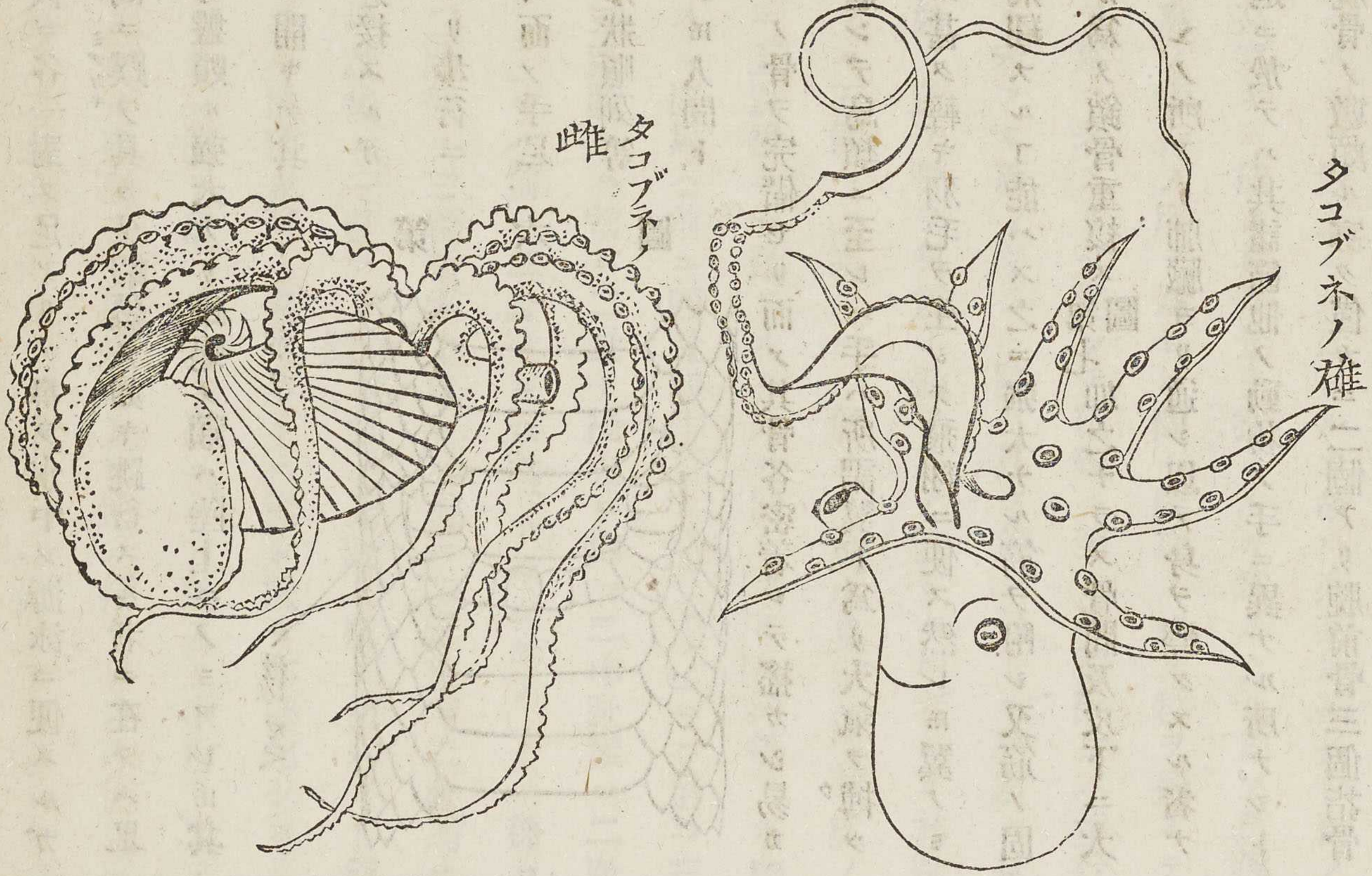


ニハ特ニ一種ノ長キ足ヲ生シテ之ヲ雄ノ腹内ニ通シ精虫  
ヲ注キテ之ヲ雌ノ腹内ニ入レ交接ノ機能ヲ爲スノ足アリ  
殊ニ甚奇妙ナルハ<sup>タコフネ</sup>艇魚ト稱スル<sup>タコ</sup>章魚ノ一種ナリ雄ハ丸坊  
主ニシテ尋常ノ章魚ノ如ク只足ノ短キノミ雌ハ介ノ舟ニ  
乗レリ而シテ交尾期ニ至レハ雄ノ足ノ間ニ一本ノ長キ足ヲ  
生シ之ニ精虫ヲ注ケハ自ラ脫離シテ水中ニ浮游シ雌ノ舟  
ニ逢ハ其内ニ入リテ交接ス又次年ノ交尾期マデニハ再ヒ  
之ヲ生スル者ナリ **第四圖** 又進ンデ魚類ニ至レハ魚ノ脊鳍臀  
鳍、尾鳍、胸鳍、腹鳍ハ皆足ナリ之ヲ人間其他ノ上等動物ニ  
比較スルルハ胸鳍ハ手ニシテ腹鳍ハ足ナリ故ニ胸腹兩鳍  
ニ於テ前ニ言ヘル四部ヲ區別スルヲ得ベシ其扁形ニシテ  
扇ノ如キハ水中ニ游泳スルニ便スルカ爲メナリ **第五圖** 魚ニ  
モ亦鳍ノ變形スル者アリ今一ノ例ヲ舉クレバ「コバン  
イタミキ」ト稱スル魚ハ頭上ニ小判形ノ吸着器アリ舟ノ  
底ニ吸着シテ舟中ヨリ棄ル所ノ食物ヲ取り又ハ「サメ」  
「フカ」ノ咽下ニ吸着シテ其生魚ヲ捕食スルル外ニ落ルモ  
ノヲ食フ **第五圖** 又亞弗利加及南亞米利加ニ産シテ沼ニ棲息  
シ水アルル<sup>エラ</sup>ハ<sup>エラ</sup>鰓ヲ以テ呼吸シ夏月ニ至テ其水ノ乾涸スル



片ハ肺  
ヲ以テ  
呼吸ス  
ル所謂  
有肺魚  
ハ常ニ  
泥中ニ  
在リテ  
游泳ス  
ルコト  
キカ故  
ニ胸鰭  
變シテ  
絲ト爲  
ル者是  
ナリ又  
進ンデ  
龜蜥蜴  
カメトカガ

第 四 圖



蛇鯢魚

蝦蟇ノ類ニ至テハ蛇ノ大槪

皮下ニ在ル肋骨ノ下端ニテ支ヘテ進行スルガ故ニ足ナシ然レモ其中「ポア」ト稱スル鱗蛇ニハ後足アリ其爪ノ先ノミ皮外ニ出テ腹裏ニ在ル各部ハ他ノ動物ニ類似セリ

五



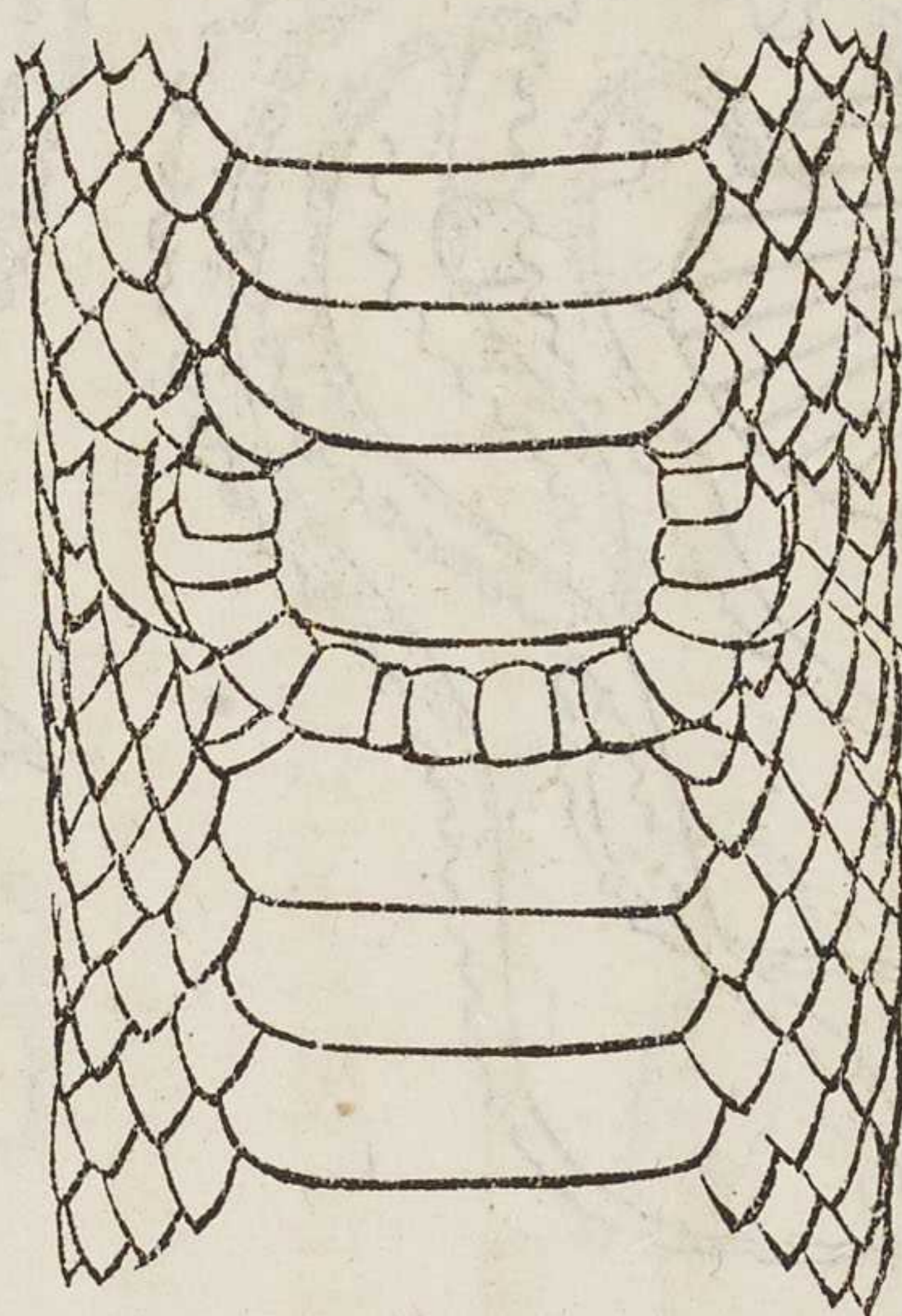
第六圖 龜鯢魚蝦蟇ノ如キ

シ水アル片ハ鰓ヲ以テ呼吸シ夏月ニ至テ其水ノ乾涸スル



ハ皆前後ニ各一對ノ足アリテ專ラ水中ノ游泳ニ便スルガ  
 爲メ趾間ニ蹼<sup>ミヅカキ</sup>ヲ具フ又蝦蟇ノ如キ跳行スル者ニ在テハ足  
 ノ先及骨盤頗ル強大ナリ蜥蜴<sup>トカゲ</sup>ノ類ハ陸上ニノミアレ其  
 足兩方ニ開キテ其  
 腹地ニ近接スルガ  
 故ニ素ヨリ歩行ニ  
 便ナラズ而ノ手足  
 ノ骨ノ形狀順列等  
 ニ別アレ人間ト  
 稍々同一ノ骨ヲ完備セリ而ノ其骨各密着シテ搖カシ易カ  
 ラズ又進ンテ鳥類ニ至レハ手ハ所謂翼ト爲リ大氣ヲ搏ツ  
 ニ要スル甚タ輕キ羽毛ヲ生シテ飛翔ニ便ス然レモ翼ノミ  
 ニテハ飛翔スルヲ能ハス之ニ強大ナル筋ヲ附シ又筋ノ固  
 着スルガ爲メ鎖骨重複ス  
 氣ヲ容ル、ノ所アリ肺臟ヨリ通シ以テ身ヲ輕クスル者ナ  
 リ其構造ニ於テハ其諸節他ノ動物ノ手ニ異ナル所ナシト  
 雖モ只腕骨ノ數頗ル寡ク僅カニ二個アリ腕前骨三個指骨  
 三個アリ而モ其發育甚タ不完全ナリ足モ亦他ノ動物ト大

第六圖

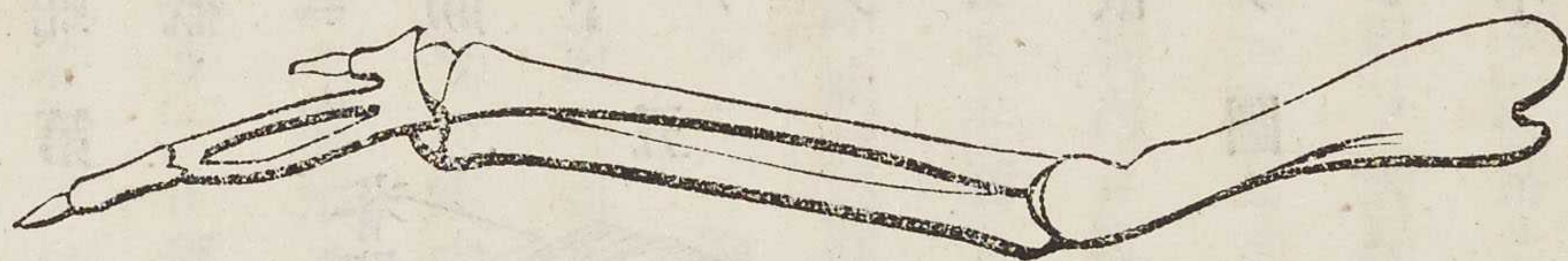


ボア

後足

差ナシ只跗前骨ノ缺如スルノミ而ノ歩行ニノミ要スル者  
 ハ駝鳥ノ如ク其趾前方ニ向フ而ノ亞弗利加ノ駝鳥ニハ二  
 趾アリ  
 鳥ノ翼ノ骨  
 二ハトリノ脚  
 三ハニ鳥駝ノ加初米亞リア  
 趾アリ雀鴉鴿鷄等ニハ三趾前向シ一趾後向ス水禽ハ水中  
 ニ游泳スルカ故ニ蹼アリ杜鵑啄木鳥鸚鵡ハ木ニ攀上スル  
 ガ故ニ二趾前向シ二趾後向ス鷺鶴ハ水中ヲ涉リテ食ヲ求

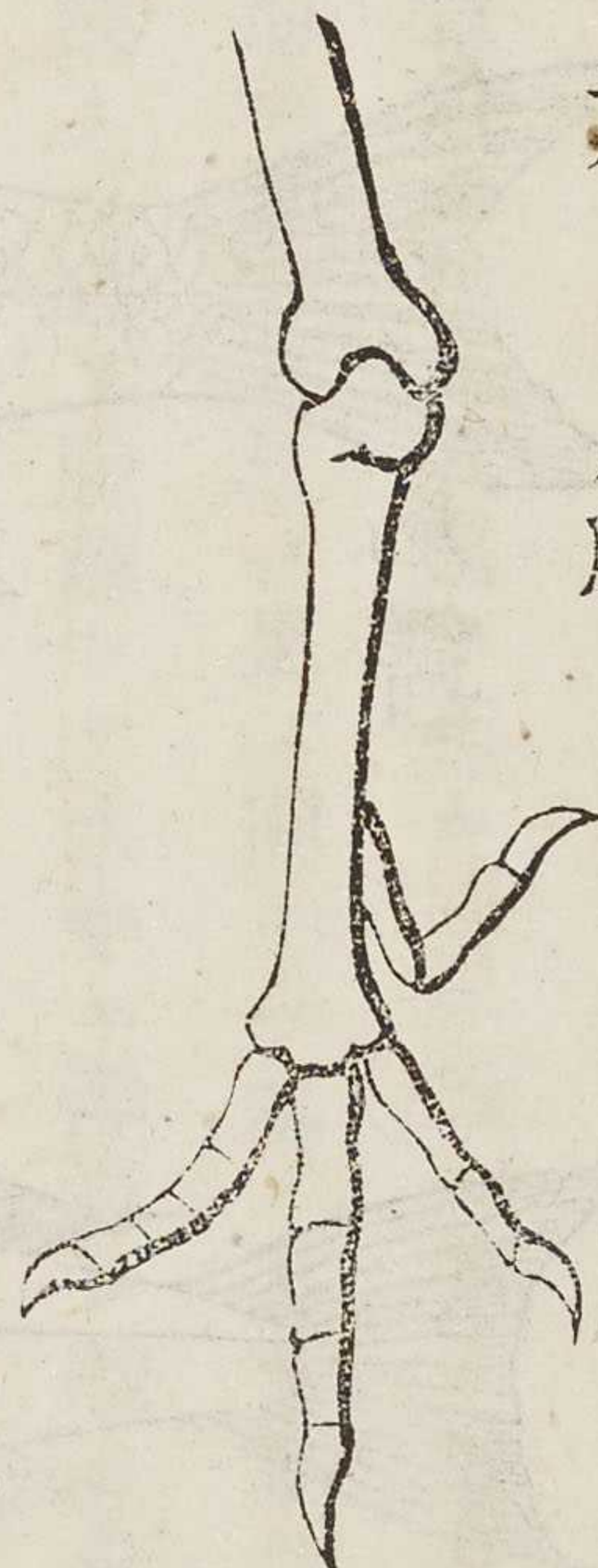
第七圖



アフリカ駝鳥ノ脚



アメリカ駝鳥ノ脚



二ハトリノ脚

ムルガ故ニ其足甚タ長ク駝鳥ハ翼ノ不完全ナルガ爲メ飛

馬ノ脚



三個アリ而モ其發育甚々不完全ナリ足モ亦他ノ動物ト大

ガ故ニ二趾前向シ二趾後向ス鷺鶴ハ水中ヲ涉リテ食ヲ求

ムルガ故ニ其足甚々長ク駝鳥ハ翼ノ不完全ナルガ爲メ飛  
 フコ能ハスシテ地上ニ疾走スルカ故ニ亦其足甚長シ而  
 趾ノ數甚寡キハ能ク其疾走ヲ扶クルカ爲メナリ凡テ鳥類  
 ノ足ハ專ラ歩行ノ用ヲ爲セ且間々鷹鷂ノ如ク物ヲ擱ミテ  
 手ノ用ヲ爲ス者アリ又進ンテ獸類ニ至レバ前後共ニ歩行  
 ニ適スル者アリ而シテ蹄ヲ具フ蓋シ蹄トハ諸君カ見  
 ラル、如ク趾ノ骨ヲ角質ノ鞘ヲ以テ包ミタル者ナリ其趾  
 ノ數多キハ五個ニ寡キハ一個ナリ就中兔、栗鼠、猫、虎ノ  
 如キ前ニ五趾後ニ五趾アルハ人ニ同シナイル河等ノ水中  
 ニ棲息スル河馬ハ前ニ四趾犀牛「ナマケモノ」ニハ前ニ三  
 趾後ニ三趾豚ニハ前ニ二趾ト後方ニ向フ二小趾後ニ二趾  
 「アリクヒ」ニハ前ニ二趾後ニ五趾「ナマケモノ」ノ一種ニ  
 ハ前ニ二趾後ニ三趾麋鹿牛羊ニハ前ニ二趾後ニ二趾馬ニ  
 ハ前ニ一趾後ニ一趾アリ第八圖而シテ此趾ノ數モ初メヨリ然  
 ルニアラス地球表面ノ變化スルニ從テ趾モ亦變化シタル  
 者ニシテ今一例ヲ舉レハ古ノ馬ニハ三趾アリ中古ノ馬ニ  
 ハ三趾アレ且兩側ノ二趾短クシテ地ニ接セズ現今ノ馬ニ  
 ハ其兩側ノ二趾全ク消失シテ中央ノ一趾ノミヲ存セリ是

古生物學上ニ於テ最モ明カナル所ナリ故ニ今日ニテモ偶々三趾ヲ具ヘテ生ル、ノ馬



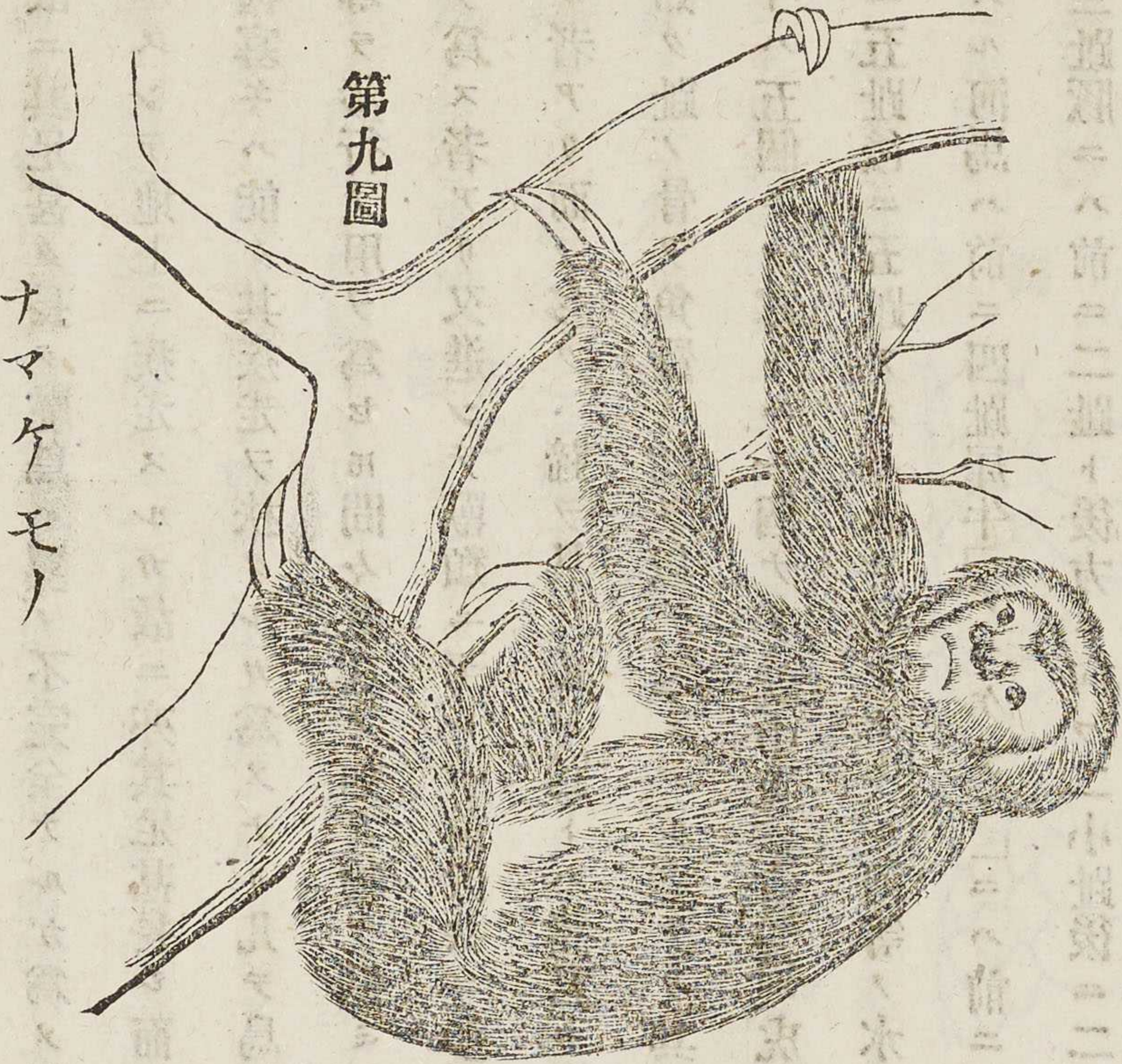
第九圖 而シテ其馬鹿ニ疾ク走ルモノ即馬鹿ノ如キニ在テ  
 ハ其足甚長クシテ趾ノ數甚寡ク且足ノ先ヲ以テ歩シ又狼  
 犬ノ如キ其趾ノ數ハ寡キニアラザルモ趾頭ノミニテ歩ス  
 ルガ故ニ疾走スルヲ得ルナリ而シテ手足ノ回轉ヲ要セサル



が故ニ前ニテハ撓尺ノ二骨後ニテハ脛腓ノ二骨中尺脛ノ  
 二骨ノミ發育ノ撓腓ノ二骨全ク闕如スルモノアリ斯ノ如  
 キハ疾走最モ巧ミナリト爲ス又前肢ヲ以テ物ヲ握ムヲ要  
 セサルカ故ニ鎖骨ナシ之ニ反シテ此兩骨共ニ十分ニ發育  
 シタル者ハ其回轉極メテ巧ミナレトモ歩行スルヲ能ハス夫  
 ノ「ナマケモノ」ハ其歩行ノ最モ遅々タルガ故ニ此名稱ヲ  
 得タリ諸君ハ人間ノ「ナマケモノ」ハ隨分御了知ナランガ  
 動物ノ

「ナマ  
 ケモノ」  
 ハ動物  
 學ヲ修  
 メタル  
 人ニア  
 ラザレ  
 バ或ハ  
 御了知  
 ナキ人

第九圖

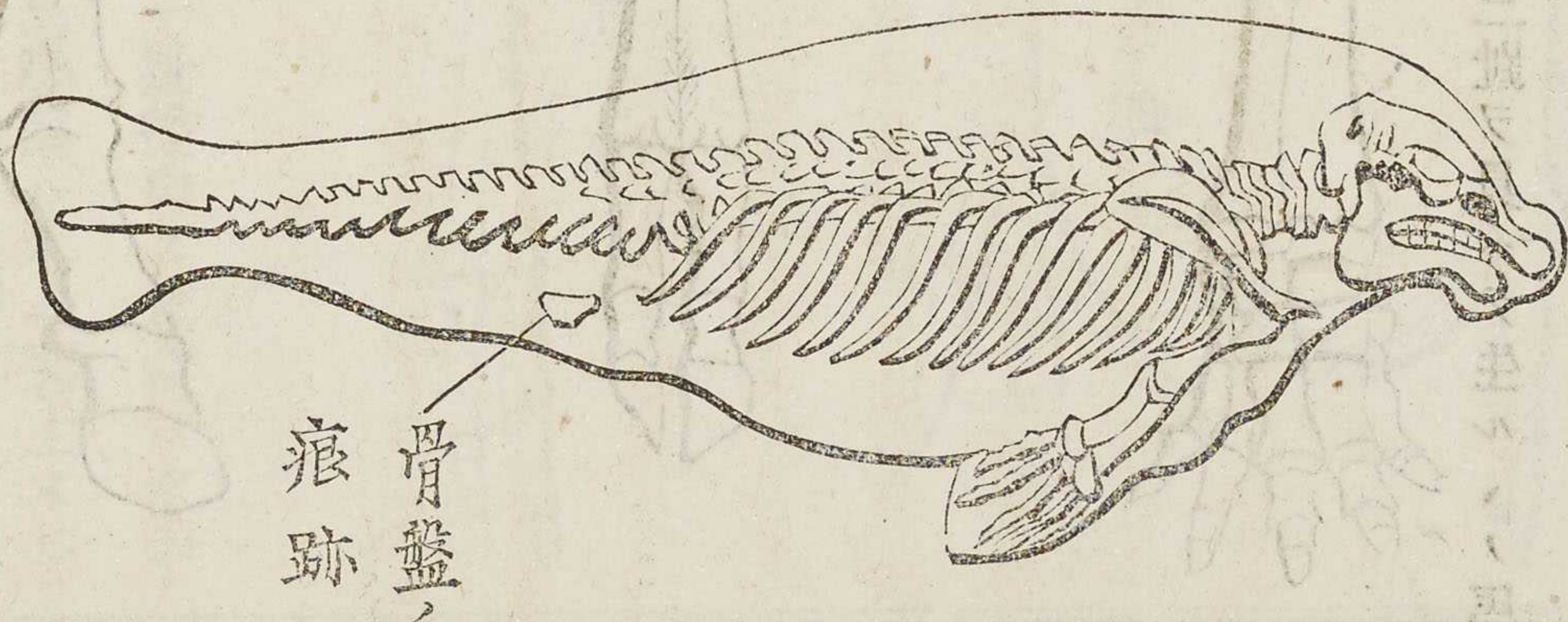


ナマケモノ

モアルベケレハ茲ニ一覽ニ供セン  
 第九圖及  
 標品ヲ示

但此動物トテモ跛鼈千里驚馬  
 十駕ノ譬ヘノ如ク絶ヘス進行  
 スル所ハ他ノ疾走ニ適スル足  
 ヲ具フル者ノ「ナマケル」ヨリ  
 モ尙ホ遠方ヘ行クヲ得ルナ  
 ラン水中ニ游泳シテ水ヲ搔ク  
 膾肭獸ノ如キ土中ニ棲息シテ  
 土ヲ鑿ツ鼯鼠ノ如キ前肢ヲ甚  
 シク使用スルモノハ必ス強大  
 ナル鎖骨ヲ具ヘテ之ヲ支フ鯨  
 ノ如キハ水中ニノミ在リテ陸  
 上ニ歩行スルヲナキカ故ニ前  
 肢ハ魚鱗ノ如ク變形シテ水ヲ  
 搔クニ便シ後肢ハ其用ナキカ  
 故ニ骨盤ノ痕跡ヲ存スルノミ

第十  
 圖  
 (以下次號)



第十圖



雜報

○故江沼元五郎氏紀念金 故東京大學御用掛醫學部動物學教場補助兼理學部生物學教場補助江沼元五郎ハ曩に同學の命を受け朝鮮國出張中病に罹り釜山浦に於て死去せしが今般山口縣士族服部一三外二百五十貳名及東京生物會會員東京植物學會幹事等より同人は生前植物學上ノ就きては非常に盡力勉勵し其の功少からざる者ふ付き紀念の爲メ金百貳拾五圓を東京大學へ獻納し右金員の利子を以て毎年動物學標品採集費又は右學科用ノ書籍費に充てられ度趣を東京大學へ願出て去月十八日同學に於て之を聞届けたり (官報)

明治十八年四月廿五日發發

三十九

○東京大學 同學文學部附屬古典科法醫兩學部別課醫學製藥學課ハ自今新募を止め現在學の生徒卒業の期に至れハ右學科は廢止せらるゝ由又同學理學部ハ來る夏期休業中本郷に引移え法醫文學部と合併せらるゝ由  
○脚氣病因 東京大學御用掛兼內務省御用掛緒方正規氏ハ先般來脚氣病因調査に從事致し居られしか今般其病因ハバクテリアの一種なる事を發見致され甚だ大切なる成

蹟を得られしに付き去る十四日午後東京大學理學部講義室に於て研究の成績を演せられプレハート等を示されたり右に就き加藤弘之長與專齋の兩君より弊社員の内一名出席あるべき様懇切なる案内と辱ふせり

○新版書 前號に Claus 氏動物書ノ英譯前部上梓となりたることを載たるか其後部も先日發兌となりたり實に動物學ノ志す者欠く可らざる良書なり右代價ハ前部廿一志後部十六志なり又近頃 H. Klein 氏著 Mico-Organisms and disease. といへる書ロンドンにて發兌になりたり右は病氣等ノ非常なる關係ある彼のバクテリア類の事を簡單に説きたる良書なり其價は四志六片なり

○農商工公報 今般農商務省より農商工公報と題せる雜誌を發兌せられ弊社へも一部を寄贈なりたり  
○集談會 大學醫學部教員諸君の集談會ハ於てハ從來毎月一回宛集會せる處漸々講談の事件増加するを以て自今二回となし其一回に於てハ主と志て内外學術の進歩を報告し他回を以て自家ハ研究に係る事業の報道に充る目的なりと云フ



○物理學套言譯語 物理學套言譯語會ニ於テ議定セル譯

語ハ乞ふて本誌に記載し來れるか今や猶理學上の套言は略議了したれとも譯語の不穩當と申立る者往々之あるに付き一たひ活版に摺り立て猶一應之を衆議に付すと云ふ

○去二日東京大學所轄小石川植物園於て東京化學會の第七年會を催ふされ當日ハ會長櫻井錠二氏の報告並に工部大學校教師ダイブルス氏の演說あり尙會員の究研に關する論說標本其他化學上珍奇なる物品書籍等の小展覽會と聞き以て當日の興を添たりと來賓は渡邊洪基、濱尾新、辻新次、矢田部良吉、ダイブルス、ワグネル、アイクマン、フエスカ等の諸氏にて甚だ盛會なりし由

○英國輕氣球を用ふ 英國は此度スーダンの役に敵の動靜を觀察する爲め輕氣球を利用せんとて既に三個の輕氣球及び敵の位置と測候するに必要なる諸器械を悉皆運送船に積み送れりと是れ同國の兵事に此機械を用ふるの始めなりと云ふ是等輕氣球に充たす水素瓦斯は壓縮して數個の鉄管に入れ送れたりと云ふ此鉄管は每個の重さ半「トン」なるを以て本營に残し置き其内にて水素を製造し

之れを管中に壓し詰める積りなりと而して此目的を達するに入用なる材料は(小さき瓦斯溜をも)既に船積し且つ猶ほ多量の瓦斯を製するに必要なる藥品をも用意したりと又輕氣球は之を揚げ放ちにせずして大地より繩或を針金にて繋ぎ置き地上の者と傳話器を以て交通する由

○工業上雲母石の功用 雲母石の貴重なる性質は酸類に侵されずして燃燒するをなく又た水及び空氣の滲透を妨げ且つ之を剝ぐときは非常の薄片となし得るにありさて此品ハ此の如き性質あるふより種々之を應用し近年に至り大に世人の注意を喚起せり獨逸國プレスラウ府マックス、ラフェイル氏の製造所にては十九年來其應用に従事し次第に改良を加ふるに至れりと云ふ抑も該品を透明なるものなれど顯微鏡學上の諸標本並びに植物標本の蓋ひとなすに甚だ適當なりとす英國の機械製造場に於ては金屬層の衝觸により硝子窓と破壊するが故に屢々之と硝子に代用すると云ふ又た近年に至りては之れを蘇言機傳話機の膜に供す又た其板石を鎔鑛爐の戸に狹み以て爐内と窺ふに便にす是れ烈火の工人の眼を刺撃するを豫防するに

足ればなり又た軍艦用羅針盤の「ダイヤル」並びに硝窓よ

此外尙多カルベシ拙者モ此數名ヲ雜記中ニ記シ置タル也



足ればなり又た軍艦用羅針盤の「ダイヤル」並びに硝窓も之を用ひ敵船より砲發により起る振動の爲め硝子の破碎するを防ぐ又た之れを燈蓋に用ふるときは決して燃焼せざるを以て甚だ便利なりとす又た此品熱を傳導する力甚だ弱ければ室内にて暖爐等の前に立て置く隔子スクリーンを用ひて大に便利なりと云ふその室内の一部分の温度を甚だ高からしめずして之れを平均にし且つ格別不都合もなく火焰を眺むるの快樂を與ふるを以てなり其他此品の貴重なる應用を鑄物場製造場等の如く熔融金属を取扱ひ又たは爐内の烈光を見ざるを得ざる場所にて工人の使用する眼鏡を製するにあり

雜錄

○鳩話

伊藤圭介漫記

鳩ノコヲ專ラニ記載スル書ハ拙老寡聞未ダ觀タルコナシ鳥ノコヲ記シタル書中ニハ往々少々宛載セタルモノナレハ夫ヲ拾ヒ輯ムルヨリ外ナカルベシ

イヘバト 和名鈔ドバト カヒバト フタコエドリ 古歌  
ドバトハ堂バトノ略ナリ漢名鴿 ○キジバト ○マバト ○ジ  
ユツカケバト ハチマシバト トシヨリコヒ 班鳩 ○ナ  
ンキンバト ○ベンガラバト ○錦バト 一名アヤバト 八重島  
産琉球産 ○暹羅バト ○長生バト ○尺八琉球産 ○孔雀鴿 鷓  
鴒 ○黑鳩 烏鳩 ○アホバト 青鶴 ○紅バト ○カブトバト ○銀  
鳩 本國バト ○コウルバト ○シロコバト ○豆バシバト ○シ  
ラバト 與三次バト

此外尙多カルベシ拙者モ此數名ヲ雜記中ニ記シ置タル也其實物ニハ甚ダ素人ナリ養禽家熟知ノ人ニ御質問可然」

鴿ハイヘバト鳩ハヤマバトト訓ゼリ一名飛奴ト云三餘贅筆云鳥之中惟鳩性最馴人家多愛畜之每放數十里或百里外皆能自返亦能爲人傳書昔人謂之飛奴」何カノ隨筆ニ見タル覺ヘアリソノ說云麻布ニ在テ多ク鴿ヲ養フアリ或人之ヲ求メ去テ目黒不動ヤ淺洲觀音ニ携ヘ去テ放ツニ其夕ニモトノ家ニ皈ルト又西陽雜俎ニモ云大理亟鄭後禮言波斯船上多養鴿能飛行數千里輒放一隻至家以爲平安信」

張九齡少年時家養群鴿每與親知書信往來只以書繫鴿足上依所教之處飛往投之九齡目之爲飛奴

拙老故郷ノ名古屋ト津嶋トハ相距ルコト五里ナリ拙幼年ノ頃一話ヲ聞タルヲ覺フ津島ニ富ノ興行アリソノ札ヲ賣ル店モ名古屋ニ多クアリタリ山師ノ技倆ニテソノ中リ鬮ノ番號第一第二突キ留等ヲ小キ紙片ニ記シ鳩ノ足ニ縛リテ津島ニテ放ツソノ鳩名古屋ノ家ニ返レハソノ番號ヲ以テ残り札ヲ吟味シ富札ノ賣ル店ニテ直ニ買ヒ集メルナリ富ノ中リ番號ノ元ヨリ未ダ通行ノ前大ニ利ヲ得シコナリシニ度々ノコトナレバ遂ニソノ計略ヲ露顯シ大ニ六ヶ敷カリシヨシ承リタルコトアリシコト鳩ヲ遣フコトハ西洋ニモアリシト覺ユ又軍陣中ニモアルコトノ様ニ覺ヘ居ダリ

學會記事

○地學會記事 本年三月十七日農商務省地質調査所ニ於テ例會ヲ開ク會員横山又次郎君ハ瑞人ナートルスト氏ノ日本植物化石論ヲ述ヘ併セテ自己ノ研究ニ係ル加賀飛驒



并ニ越前産ノ侏羅系植物論ヲ演ス次ニ會員鈴木敏君ハ小笠原父島地質詳記ヲ演セラレタリ日本出席員十五名ナリ

○東京數學物理學會記事 四月四日午後一時半大學理學部ニ會ス「出席人員十九名」記録委員隈本君前會ノ記事ヲ朗讀シ會員ノ保認ヲ得「事務委員長村岡君東京大學ヨリ學藝誌林第九十一號九十二號及ヒ大學メモアル第五冊ヲ寄贈アリタル」ヲ報告ス「小川巖君ハ川北菊池君ノ紹介ヲ以テ入會アリタリ」理學士二見鏡二郎君ハ三輪谷田部君ノ紹介ヲ以テ入會ヲ申出テタリ「向井泰藏大村一秀ノ二君退會ス」當學會第二年期ノ事務委員ヲ改撰シ改撰ノ上承諾サレタル諸君左ノ如シ

事務委員長 山川健二郎  
會計委員 川北朝鄰  
記録委員 隈本有尙  
全 村岡範爲馳  
全 寺尾壽

右終テ左ノ演說アリタリ  
メトリクス法ノ小引 隈本有尙  
流動体運動ノ研究 北尾次郎

○東京化學會記事 三月廿一日午後二時ヨリ例場ニ會ス農商務省工務局ヨリ同局月報第三十二號ヲ東京學士會院ヨリ同院雜誌第七篇ノ一ヲ工學會ヨリ同會會誌第三十七卷及ヒ第三十八卷ヲ萬年會ヨリ同會報告第六輯第十二卷ヲ會員河喜多能達君ヨリ小冊子二冊ヲ本會へ寄贈セリ

例ニヨリ來ル四月二日本會第七年會ヲ開ク「ニ決シ會長ハ石藤、河喜多、高松ノ三氏ヲ右委員ニ撰舉シタリ小笠原金吾氏ハ會員村瀨光國、堀鉞之丞兩氏ノ紹介ヲ以テ岩佐巖氏ハ會員櫻井錠二松井直吉兩氏ノ紹介ヲ以テ本會へ入會ヲ申込マレタルガ本日出席會員ノ投票ヲ以テ孰レモ入會ヲ許サレタリ

石藤豐太氏會員横地石太郎氏著述本邦紙製法ヲ演述ス高山甚太郎氏會員肥田密三氏及コルセルト氏ノ研究シタル吓吵中ノ一半酸化物ノ溶解試驗并ニ酒精鹽酸ノ硅酸ニ於ケル溶解作用ニ就キ大意ヲ演述ス久原躬弦氏鹽化「フタール」ノ構造ニ付試驗ノ結果ヲ述フ吉田彦六郎氏秋田縣下羽後國由利郡小田村産出ノ「アスファルト」及其油試驗ノ結果ヲ述フ河喜多能達氏雷藥構造ニ關シ試驗ノ成績ヲ述フ櫻井錠二氏燃料發熱力ノ計算法ニ就キ疑問ヲ出ス松井直吉氏消火水試驗並ヒ分析ノ結果ヲ報ス本日出席會員十七名ナリ

○東京生物學會記事 明治十八年三月廿一日午後二時ヨリ東京大學理學部ニ於テ通常會ヲ開ク出席會員十八名幹事前會ノ記事ヲ朗讀シ終テ左ノ演說アリ  
蝶ノ話 石川千代松君 海綿類ニ神經アルヲ 箕作佳吉君

右終テ動物學上ノ套言譯語ヲ定ムル「並ニ動植物分布學ヲ學フニ必要ナル地圖ヲ製スル」ヲ議決シ次ニ田中房種松浦歡一郎氏ノ入會ヲ許ス

右終テ動物學上ノ套言譯語ヲ定ムル「並ニ動植物分布學ヲ學フニ必要ナル地圖ヲ製スル」ヲ議決シ次ニ田中房種松浦歡一郎氏ノ入會ヲ許ス

右終テ動物學上ノ套言譯語ヲ定ムル「並ニ動植物分布學ヲ學フニ必要ナル地圖ヲ製スル」ヲ議決シ次ニ田中房種松浦歡一郎氏ノ入會ヲ許ス